奈良教育大学
国際交流留学センター主催 シンポジウム
令和元年度学長裁量経費プロジェクト

教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える

報告書

巻頭言

プロジェクト代表
国際交流留学センター　和泉元千春

本学では、教員養大学としての国際交流の在り方について「国立大学法人奈良教育大学国際交流に関する基本方針（改正平成25年3月6日規則第6号）」を定め、「国際的視点に立った教員の養成に資する」目的で国際交流事業を展開しています。それを受け、「グローバル人材」とその育成について、教員養成や学校教育の文脈でとらえなおすことが必要だという問題意識から、平成26年度に国際交流留学センターを中心とした学内組織横断的な構成員による本プロジェクトがスタートしました。

本プロジェクトに先立って平成25年度に、国際交流留学センターでは全1回生を対象に「海外留学、国際交流についての意識調査」を実施しました。その調査では、海外留学について「したくない」あるいは「考えたことがない」者が全体の43%、その理由として41%の者が「興味がない」と回答しました。また、留学の目的を40%の者が「異文化理解の機会」と考え、すべての者が「留学生との交流に興味がある」としているものの、実際には学内での異文化交流は活発に行われていないという現状も明らかになりました。一方、授業等で学生に「あなたの周りに外国人がいますか」と問うと、「観光客」という回答しか聞こえてこないということも未だに少なくありません。これらの現状は、学校教育の現場で「グローバル人材」の育成を担う教員を目指す学生たち自身の異文化経験、グローバル意識や多文化共生社会に対する理解の欠如の現れだとも言えるでしょう。

このような課題は、多くの大学が抱えるものだと思われますが、本プロジェクトでは6年間にわたって、学生や現職教員たちが「グローバル人材」の育成について当事者意識をもって考える機会を提供してきました。そしてプロジェクト完了年度となる本年度は、その総括として本学の吉村雅仁教授に「複言語主義」に基づく言語教育の立場から「グローバル人材」とその育成についてお話しいただき、さらに小学校外国語教育、国際バカロレア・中等教育、外国人児童生徒等教育という3つの現場の現職教員の先生方にご自身の教育実践と「グローバル人材」の育成に関わる体験を紹介していただきました。参加者アンケートでは、現職教員になってもなお日々の実践で模索する姿に刺激を受けたという声と同時に、自身を取り巻くグローバル社会、多文化共生社会の現実への気づきの声が多数聞かれました。「グローバル人材」育成を担う教員の養成は、一朝一夕に成しえるものではありません。ますます加速化する社会のグローバル化の中で、現実と未来の社会を私たち一人ひとりがしっかりと見据えて日々模索することの大切さを具体的に示しながら、教員養成大学としての「グローバル人材」の育成に取り組み続ける必要があると感じています。

2020年3月

奈良教育大学　国際交流留学センター主催　シンポジウム
令和元年度学長裁量経費プロジェクト
教員養成大学における「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究

シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」

目　　次

講演記録：学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？…… 1
吉村雅仁氏（奈良教育大学教職大学院教授）

当日配布資料
話題提供①：小学校の外国語教育の現場から…… 18
岸下哲史氏（奈良市立都祁小学校教頭）
大形憲治氏（奈良市立椿井小学校教諭）

話題提供②：国際バカロレアと中等教育の現場から…… 25
熊谷優一氏（大阪市立水都国際中学校・高等学校
国際バカロレア・コーディネーター）

話題提供③：外国人児童生徒等教育の現場から…… 30
重内庸司氏（四日市市教育委員会指導主事）

講演：学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？…… 37
吉村雅仁氏（奈良教育大学教職大学院教授）

シンポジウム進行用投影資料…… 44

参加者のコメント
話題提供者への質問＆感想…… 46
講演の感想…… 58
シンポジウム全体の感想…… 62

シンポジウム広報用ポスター…… 67

▼プロジェクト名

学長裁量経費プロジェクト「教員養成大学における「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究」

▼プロジェクトメンバー

和泉元千春	教育連携講座　准教授・国際交流留学センター専任教員
勝原　崇	本学附属小学校　教諭
松田孝史	本学附属中学校　副校長
渋谷真樹	学校教育講座　教授・国際交流留学センター長
長谷川かおり	本学附属幼稚園　副園長
頓宮勝	国際交流留学センター　特任教授
橋崎頼子	学校教育講座　准教授
松山豊樹	理科教育講座　教授・理数教育研究副センター長
横山真貴子	学校教育講座　教授・本学附属幼稚園　園長
吉村雅仁	教職大学院　教授

▼プロジェクト概要

本プロジェクトは、グローバル化に対応した人材育成が求められる昨今の情勢に鑑み、教員養成大学としての「グローバル人材」の在り方とその育成に関して研究を行うことを目的としている。プロジェクトでの成果概要は以下の通りである。

〇シンポジウム

［平成 27 年度］

＜第１回＞2015 年 12 月 12 日（土）13：00-17：00

講演「「グローバル人材」になる―言語文化教育の個と社会の立場から―」（早稲田大学名誉教授、言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア主宰　細川英雄氏）

実践報告①「奈良教育大学における留学生教育と連動した言語文化教育の実践」（和泉元千春・岩坂泰子），実践報告②「奈良教育大学附属小学校「言語・文化」の実践」（林綾・岩坂泰子）

＜第２回＞2016年3月19日（土）13：00-17：00

講演「グローバル時代の教員養成の課題―「異文化間能力」育成の視点から―」

（目白大学学長 佐藤郡衛氏）

実践報告①「ＥＳＤの視点に基づいた道徳性育成の授業実践」（小嶋佑伺郎），実践報告②：「異文化間能力」を育む教員養成－博物館における校外学習をめぐって」（渋谷真樹）

［平成 28 年度］

＜第１回＞2017年1月7日（土）13：30-17：00

講演「「多文化教員」に求められる資質・能力―多様な言語文化背景の子どもたちの学びの場をデザイ

ンするために」（東京学芸大学教育学部教授　齋藤ひろみ氏）

実践報告①「奈良市における日本語指導が必要な児童生徒の現状」（奈良市教育委員会学校教育課教育推進係日本語指導コーディネーター　吉村瑞希氏），実践報告②：「子どもたちの世界を広げる附属小学校における「言語文化」の教育実践」（和泉元千春・岩坂泰子・林綾）

＜第２回＞2017年2月18日（土）13：30-17：00

講演「新しい教育課程と学びのイノベーション-コンピテンシーを育む学びのデザインと教師の育成」

（国立教育政策研究所・初等中等教育研究部・総括研究官　松尾知明氏）

実践報告①「地球市民意識の形成と道徳教育―ボーダー（境界）を考えることから他者とのつながりを実感する実践を通して―」（小嶋佑伺郎氏），実践報告②「グローバル時代の市民性を育てる教員養成―教員志望学生と留学生の交流授業から―」（東京学芸大学教育学部准教授　南浦涼介氏）

［平成 29 年度］　2017 年 12 月 9 日（土）13：30-17：00

講演：「「やさしい日本語」と学校教育」（京都外国語大学外国語学部教授　森篤嗣氏）

ワークショップ「インタビュー詩を創ろう」（ファシリテータ：目白大学・専任講師　横田和子氏・和泉元千春）

［平成 30 年度］　2019 年 1 月 24 日（木）16：30-18：30

講演・ワークショップ「学校・地域でできる文化言語の多様な子どもの支援」

（同志社大学　日本語・日本文化教育センター・准教授　櫻井千穂氏）

※発表者の所属・肩書はシンポジウム開催当時のもの。

※上記シンポジウムの詳細報告は各年度の報告書を参照のこと。http://cies.nara-edu.ac.jp/report.html

〇調査研究

・本学既存の教育学部科目と留学生向け科目、本学附属校（附属小学校、附属中学校）等での異文化理解にかかる教育（国際理解教育など）の連動等によって、本学学生のグローバル意識の醸成を試み、それらの実践の成果を学外に発信した。（主要なもののみ）

和泉元千春・岩坂泰子（2016）「教員養成大学におけるグローバル化に連動した国内学生と留学生共修による言語文化教育」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』2 号

和泉元千春（2019）「教員研修留学生と国内学生の協働を取り入れた言語学習の実践―教員研修留学生プログラムにおける中学校交流の準備を例として―」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』5 号　ほか

・ストラスブール大学教職大学院教授アンドレア・ヤング氏（バイリンガル教育、多言語複言語教育）を訪問し情報収集を行った。（2014 年 8 月 25-26 日）

〇教育実践・学内の国際交流

・留学生教育と教員養成の連動による附属幼稚園の国際交流活動，本学附属小学校「外国語」（言語・文化活動），附属中学校「特別の活動」への協力（それぞれ毎年 1 回実施）

・本学と奈良県山添村との「包括的連携協力に関する協定書」に基づく教員研修留学生プログラムでの協働（毎年 2-3 回実施）
・国際交流イベント「留学生と友達になろうキャンペーン」の開催（毎年 1 回）
・国際交流イベント「なっきょん’s café」の開催（毎月 1 回）

上記の実践実績・研究成果を踏まえて、今年度（令和元年度）は本プロジェクトの総括として以下の通りシンポジウムを開催した。

日時：2019 年 12 月 15 日（日）13：30-16：30
場所：奈良教育大学　大会議室
参加者：65 名（本学学生 47 名，学内教員 5 名，学外（一般、院生）：13 名）
内容：話題提供①「小学校の外国語教育の現場から」
話題提供者：岸下哲史氏（奈良市立都祁小学校教頭）
大形憲治氏（奈良市立椿井小学校教諭）
話題提供②「国際バカロレアと中等教育の現場から」
話題提供者：熊谷優一氏（大阪市立水都国際中学校・高等学校
国際バカロレア・コーディネーター）
話題提供③「外国人児童生徒等教育の現場から」
話題提供者：重内庸司氏（四日市市教育委員会指導主事）
講演「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？」
講師：吉村雅仁氏（本学教職大学院教授）

▼後援
奈良県教育委員会、奈良市教育委員会

令和元年度シンポジウム
「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」

話題提供 ①「小学校の外国語教育の現場から」
話題提供者：岸下哲史氏（奈良市立都祁小学校教頭）
大形憲治氏（奈良市立椿井小学校教諭）
話題提供 ②「国際バカロレアと中等教育の現場から」
話題提供者：熊谷優一氏（大阪市立水都国際中学校・高等学校
国際バカロレア・コーディネーター）
話題提供 ③「外国人児童生徒等教育の現場から」
話題提供者：重内庸司氏（四日市市教育委員会指導主事）
講演「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？」
講師：吉村雅仁氏（本学教職大学院教授）

講演記録「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？：言語教育の視点から」

吉村 雅仁氏（奈良教育大学教職大学院　教授）

吉村氏：皆さん、こんにちは。奈良教育大学教職大学院の吉村と申します。現場の先生のお話ってすごいですよね。やはりパワフルだなと感じました。私の話では途中でワークを入れたり、それから、先ほどの先生方とのやりとりも挟みながら進めたいと思います。

まず今日の話の内容ですが、こういう順番で進めたいと思います。最初に「グローバル人材」という用語を、私たちは共通して使っていますが、きちんと定義しないと議論がバラバラの方向にいってしまうので、「グローバル人材」という言葉自体が一体どこから来たのかという話をします。文部科学省、中央教育審議会であったり、臨時教育審議会、それから経済産業省、といったいろいろなところから、この「グローバル人材」という言葉が使われるようになってきていますので、どのような経緯でそうなったのかという話を簡単にします。その次に、新しい言語教育観、言語教育、特に外国語学習について話します。言語というのは、できるだけその言語だけを使って勉強していけば身に付くよという考え方とは別に、最近、特にヨーロッパのいくつかの国で言われてきている言語教育観があります。それを紹介をしたいと思います。皆さんにもその教材を実際に使って体験をしてもらおうと思っています。その新しい言語教育観は複言語能力とか言語意識教育と呼ばれていますが、こういった言語教育観が「グローバル人材」というものに結びつくのではないかと私は考えるからなのです。そして、そういった新しい言語教育観から見て、「グローバル人材」というものがどのような能力を持った人かということについて、私なりの考えを述べたうえで、ではそのような「グローバル人材」を育成するためには教員としてどんな資質能力が必要になってくるのか、あるいは持つべきなのかという形で議論を進めたいと思います。

１．「グローバル人材」とは？

１－１．日本における国の「国際化」「グローバル化」「グローバル人材」の捉え方（P.37, スライド 3-5）

「グローバル人材」というのは、元々は文科省とか中央教育審議会とか、いろいろな政府の機関の中から国際化ということが議論され始めたことにさかのぼることができます。例えば臨時教育審議会の「教育改革に関する第４次答申」といったものの中で、これからの新しい国際化は、これまでの近代化の時代における国際化とは異なり、全人類的かつ地球的視点に立って、人類の平和と繁栄のために様々な分野において積極的に貢献し、国際

社会の一員としての責任を果たしていくものでなければならないということが言われました。

続いて、中央教育審議会では、「21 世紀を展望した我が国の教育のあり方について」という答申の中で、具体的に、どういう国民の育成を図るのかについて言及されています。つまり、広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度、あるいは異なる文化を持った人々とともに生きていく資質や能力の育成を図ること、国際理解のためにも、日本人として、また個人としての自己の確立を図ること、国際社会において相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎、あるいは表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ることが言われてきました。

さらに、今度はグローバル化という言葉がそれに加わって出てきます。これは中央教育審議会による「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画のあり方について」という、新しい教育基本法が出来上がる前の議論です。ここで「国際化」ではなく「グローバル化」という言葉が使われ始めます。

そして、その後、経済産業省などの文章の中に、「グローバル人材」という言葉や産学官でグローバル人材の育成をという表現が出てくるわけです。その中で、「グローバル人材」とは、グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材だと言われました。こういうものが「グローバル人材」の定義ということです。

次に、「グローバル人材育成推進会議」というものができて、そこが「グローバル人材育成戦略」というものも出しました。この中に、「グローバル人材」が持つべき能力資質として、具体的に三つが挙げられました。まず要素Ⅰ、語学力・コミュニケーション能力です。これがなぜか一番上にきています。その次に、要素Ⅱ、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲとして、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティです。こういった三つの要素が「グローバル人材」が持つべき資質能力として発表されたわけです。

加えて、自民党の「成長戦略に資するグローバル人材育成部会」の提言として、これから教育をこのように進めていきますよという方針が発表されました。そこでは、日本人としてのアイデンティティや日本の歴史・文化に対する深い教養を前提として、1. 英語教育の抜本的改革、2. イノベーションを生む理数教育の刷新、3. 国家戦略としての ICT 教育などに力を入れていくこと、そしてそのための予算も組むということが示されました。

続いて、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が出され、そしてそれが、学習指導要領につながっていったという流れがあります。つまり、教育基本法の議論のあたりから、経済界とか産業界のニーズを反映するものになってきているということです。最終的には、それがなぜか英語教育の強化とか、そういったものに置き換えられる傾向が出てきているということなのです。

これに関して、「グローバル人材」が持つべき力量、資質能力として、先ほどお見せした要素Ⅰ、要素Ⅱ、要素Ⅲを並べることに対して批判もあります。たとえば、石井(2016)は、社会的有用性を高めていくという目的で学校教育で行っていることが、いつの間にか、経済界からの要請に応えて、国際競争を勝ち抜く人材であったり、労働者として生き抜く力を育てることに矮小化されているのではないかと指摘しています。要するに、共生というよりも競争の論理が強くなっていやしないかという批判なのです。こういった批判をする人は他にもいます。ですが、いずれにしても、日本の「グローバル人材」という言葉が、こういった経緯で使われるようになってきているということをまず共有しましょう。

１－２．OECD キー・コンピテンシー（P.38, スライド 6-8）

日本での「グローバル人材」という言葉とは別に、OECD という国際的な組織などでは、これから教育の中で身に付けていくべき資質能力を具体的にどう考えたら良いかという議論がなされています。OECD というのは皆さん聞いたことがありますよね。たぶんいろいろな授業で出てくると思います。OECD、PISA などよく聞くでしょう。2003 年に OECD からキー・コンピテンシーという概念が出されます。国立教育政策研究所がつくっている参考画像（スライド 6）で説明をしますと、これから生き抜くうえで必要な、教育で培うべき必要な資質能力として、まず中心にあるのが「思慮深さ」です。Reflectiveness というという英語なのですが、思慮深さと翻訳するとしましょう。これを核心として、異質な集団で交流する。具体的には、他者とうまく関わる、協働する、紛争を処理し、解決するということです。そして次に相互作用的に道具を用いる。具体的には A. 言語、シンボル、テクストを相互作用的に用いる、B. 知識や情報を相互作用的に用いる、C. 技術を相互作用的に用いるということです。さらに、自律的に活動する。具体的には A. 大きな展望の中で活動する、B. 人生計画や個人的プロジェクトを設計、実行する、C. 自らの権利、利害、限界やニーズを表明するという資質能力というものが今後必要になってくるのではないかという議論がなされました。

最近では、やはり同じ OECD の中で、「包摂的・持続可能な世界のためのグローバル能力」ということが検討されています。それが示されたのが、この図です（スライド 7)。知識、価値、態度、技能というものをまわりに置いて、さらに左上から地域的、地球的、インターカルチャーつまり間文化的な諸問題を調べる力。次に「他者の視点や世界観を理解し、認める」。そしてさらに、「開かれており、適切なそして効果的な異文化間交流に積

極的に参加する」。左下にいって「集団の幸福・安寧や持続可能な開発のために行動する」。これがグローバル能力だと考えられています。

スライド６の三角形のキー・コンピテンシーがさらにこういうふうになっていきました（スライド 8)。左側の知識、技能、態度と価値がコンピテンシーズです。そのコンピテンシーズをどのようなことにつなげるかというのが図の右側に示されてあります。つまり、児童生徒は見通しを持ちながら行動、そして振り返りを行うというサイクルの中で新たな価値の創造をしていき、責任ある行動を取るようにする。そして、対立やジレンマを克服していく。こういうコンピテンシーズの活用が結局、個人的、あるいは世界の社会的な幸福・安寧につながっていくのだという、教育の大きな枠組みが示されています。言ってみれば、知識、技能、そして態度と価値をコンピテンシーズとして身に付けること。そして、それに基づいて行動をすることが、結局は「グローバル人材」というものにつながっていくのだということも言えるかと思います。

１－３．（話題提供者への質問）「教員として現在の教育実践をされるようになったきっかけ・体験は？」(P. 39, スライド 9)

さて、こういう「グローバル人材」、様々な定義、様々な考え方があるけれども、いろいろな考え方があっていいと思うんです。先ほど発表された 3 組の先生方にここで一つ質問をしたいと思います。3 人の先生方はそれぞれ、「グローバル人材」のイメージがあるかもしれませんが、現在されている教育活動というのは、当然ながらそのグローバル人材育成に関わっていると私たちは思います。だからこそお呼びしたわけです。ご自身の「グローバル人材」の捉え方で結構です。教員として、今日紹介をいただいた教育実践、現在の教育実践をされるようになったきっかけ、あるいは体験があるか、という質問です。転機は一つだけではないし、二つ三つあったかもしれませんが、どんなきっかけ、どんな体験をお持ちなのかを聞いてみたいと思います。どうしてこういうことをされているか。たぶんこれから教員になろうとしている学生さんの参考になると思います。じゃあ順番にお願いします。

岸下氏：あまり自己紹介もせずに話をしたんですが、僕はドイツでサッカーをしていまして、あとバックパッカーもいろいろして、27 歳からフリーターだったんです。そんな中でいろいろバックパッカーをして、モロッコというところにいました。そこでバスを待ってたら、バナナ売りの少年が布切れ一枚で入ってきて、「バナナ買うてくれ」と言うんです。運転手が「買え買え」と言うので喫茶店について行くと、そこには５歳の女の子が２歳の男の子を連れていて（私が持っているものを見て）「それ頂戴」という話をするんです。私はドイツでサッカーをしていたあと、フリーターでお金なかったからバックパッカーをしながら日本人レストランで働いてたんですけど、そんな生活が 1 年終わってどうしようかなと思ったときに、やっぱりこの経験を日本に帰って先生になっ

て日本の子供たちに伝えたいなと思ったんです。そういった海外の経験があって今に至るというところが一番大きいのかなと思います。さきほど先生がおっしゃっていましたけど、自信がある日本人が少ないのかなと思うんです。僕は海外での経験から、その自信というのを、自分自身の「自身」、つまり自分があるということが大切だと考えるようになりました。そういうことをこれからの世代に知ってもらえたら、人生ハッピーになるんじゃないかなと思ったんです。そしてそれを先生になって伝えたいなと思って、日本に帰ってきました。

大形氏：僕も何かなと考えたら、岸下先生とよく似た経験もありまして、10 代の頃、マウンテンバイクをばらしてダンボールに詰めてタイに行きました。さっきの写真に写っていた自転車に乗って、タイのチェンマイというところから、バンコクまで 1,000 キロを、地元の友達と 3 人で縦断してたんです。途中でサソリが死んでたりしました。蚊に刺されたらやばいというから蚊よけを持っていったんですけどいっぱい刺されたりもしました。それからネパールも行きました。特に山が好きでネパールに行ったというわけじゃないですけど、どんな暮らしをしてるのか見たいなと思って、2 週間、友達と二人で行きました。山岳のところで、兄弟の子どもたちに会いました。その兄弟はやっぱり裸足なんです。裸足で山道を何時間もかけて歩いていくのです。「どこ行くの？」と聞いたら、「生きるためのお水をくみに行くんです」と言って、バケツをこうやって頭の上に乗せて歩いてたんです。その子たちと一緒に写真を撮ったんですけど、とってもいい笑顔で、幸せそうだったんです。お水を取りに行くために 1 時間裸足で山道を歩いて、その間に何があるかわからへん、生きるか死ぬかわからへんという状況の中で、あれだけの笑顔を見せれるのかと思いました。やっぱり価値観の違いを感じて、それだけ世界が広くなりました。そういう子たちもやっぱり幸せに生きてるということを、自分が持った子たちにも教えてあげたいなと思った経験が現在の教育実践のきっかけとしてあると思います。もう一つは、野球をずっとやっていまして、石毛宏典さんが立ち上げた四国のアイランドリーグの 1 期生でした。私は徳島インディゴソックスというところでやってたんですけども、その中で一緒にやっていた人の中には何人かプロになった人もいました。やっぱり夢を諦めない、何事もチャレンジだということを経験しました。その後、岸下先生と出会って、僕の知らない世界をたくさん教えてもらったんですけど、やっぱりそこでも、チャレンジしていこうとか、自分の中でどんどんやっていかなあかんな、負けてられへんなという気持ちが生まれました。それからやっぱり自分の価値観だけで物事を見たらあかんなということも感じました。それが、僕の中で現在の教育実践を行うきっかけだったなと思っています。

重内氏：「グローバル人材とは」とあって、「では、現在の教育実践ってなんだろう」と私も考えておりました。教員としての転機というと、もちろんたくさんあるんですが、1 つ挙げたいと思います。ちょうど 17 年間、学校現場で、私は「全ての子に絶対力をつけ

るぞ」と思って授業をしていたんです。しかし、後期に学校が「問題解決能力の向上」に関わる四日市市の教育委員会の指定を受けたことがきっかけで、教育実践が変わっていきました。「問題解決能力って何だ」、「題解決能力ってどうやったら育つんだ」というところから始まって、それまで指導内容を全員の子どもに身に付けさせればいいと捉えていた自分がいたんですが、もっと広い視野で捉える必要性を感じたんです。それがきっかけで、それまでの自分の授業を振り返ったんです。先ほどもキー・コンピテンシーと出てましたけれども、「今までクリティカルに物事を考えられる子どもに育ててこれてたかな」とか、「コミュニケーション能力って言うけど、ペアでしゃべれていたらそれで生きる力なん？」とか。問題解決能力についても、「授業で、ペアで話すように先生が言わないとペアでしゃべってはいけないとか、グループで話してと言われないとグループでしゃべってはいけないとか、子ども自身は問題解決したいのに、それに縛りをかける授業をしていたな」とか。「いろいろな資料を与えて、複合的に考える授業ってしてたかな」とか。でも、重点目標の指定を受けたことがきっかけで、もっと広い力を持てるよう子どもたちを育てようと思いました。それは、今の教育実践を行うきっかけになったと思います。

熊谷氏：今のような教育実践をするきっかけですよね。おそらく私自身がそういうタイプの学習者だったなと思うんです。例えば一例ですが、「大きなカブ」ってあるじゃないですか。小学校 1 年生くらいで学びますよね。私はあれを小学生のときに読んで、「何、この話？うわ、きも」と思ったんです。近所付き合いもなさそうなじいさんばあさんが、怠けているからああなるんじゃないかって。じいさんばあさんになるまで何年もカブ育ててきてるっていうのに、あそこまででかくなるまでほっとくなんて何事かと思ったし、大体そこまででっかくなったものはあんまりおいしくないに決まっているじゃないですか。経験でわかっているのに、なんで抜かなきゃいけないのと思ったし。実際じいさん、ばあさん、孫、犬とかって、どんどん力が弱くなっていっているのに抜けるわけがないし、その人たちはなんで抜かなきゃいけないのかわかって抜いてるのかというのも全然わからなかったんです。村の人も参加しないから人付き合いがなさそうだ、し。とすると、取ったところで食べきれないだろうとも思うし。1 個もわからなかったんです。そのことを学校の授業で言ったら、「うるさい」と先生に言われました。大体その時代ってそんな感じかなとは思うんですけど。「気になったから言ったのに」と、なんか「うーん」というようなことをずっと学生時代は思っていました。別に授業中にそのことについてどうのということでなくていいんです。「後で先生と話をしよう」でもいい。「こんな本読んでみないか」でもいい。「何が、なのか、後で書いて見せてくれ」でよかったんですよね。特に私がとても苦手だったのは、四つの選択肢の中で一つ正解を見つけることでした。あるときは二つある可能性が否定できないので迷ってしまって「うーん」となるし、「これ 1 個もなくない？」というときもあったので。誰かの答えをコピーして受け入れるのではなく、自らの中に生じた疑問にどう向き合うの

かということはとても重要だと思います。IB の学び方に出会ったときに、「なんだ、自分なりのこの思っている答えを言ってもいいんだ」というふうに教育者としてわかって、「ああ、面白い」と思いました。

吉村氏：それぞれの先生方、ありがとうございました。先生方が自分自身の経験を振り返ってお話くださるというのが、学生のみなさんには参考になるのではないかなと思って、こういう質問をさせていただいたわけです。最後の熊谷先生の話を聞いていて、私も同じような経験があったのを思い出しました。「ごんぎつね」なんです。「ごんぎつね」という教材で、先生が「最後は兵十の気持ちはどうだったでしょうね」とか、「ごんはどうだったんでしょうね」と聞いたときに、「ごんは撃たれてもしょうがないんじゃないですか」という答えをしたんです。なんでかというと、ごんは人間の言葉をしゃべれるわけではないし、それまでいたずらをしてきたんだから撃たれても当たり前だろうなと言ったら、「駄目だ、それは」と言われて、なんで駄目なんだろうと思ったんです。要するに、今でいうKY、空気読めない答えを出すことに対して、国語の教師が「駄目ですよ」という言い方をしたんです。私はそれで国語が嫌いになりました、というような経験があります。同じような経験をしている方だなと思いながらお話を聞きました。でも、そういった経験って、ひょっとしたら、今日のトピックである「グローバル人材」というところに結びついていくのかなと思ったりもしました。

２．新しい言語教育観

２－１．複言語能力（P. 39, スライド 10）

さて、先生方の回答を受けて、「グローバル人材」に直結はしないかもしれないけども、結びついていくであろう言語教育観について紹介したいと思います。それは複言語能力という言葉です。初めて聞くという人もいるかもしれませんが、個人の言語能力というのは、複数の言語能力が並列して存在するものではなく、言語変種によって程度の異なる部分的能力が複層的に統合された一つの言語能力である、という考え方です。例えば日本語では 4 技能、英語では聴解力だけ、中国語では読解力だけという部分的な能力が、統合的な、あるいは複層的に一緒になった一つの言語能力を我々は持っているのではないかという考え方なんです。さらにその複数の言語能力には共通の基底言語能力があるということも言われています。例えば、皆さんの中の多くの人は、日本語が第一言語ですか？日本語の能力はあるとしましょう。英語を勉強しました。他の言語を勉強した人もいるでしょう。その二つ目の言語は、1 つ目の言語と共有の基底部分が重なっていると考えられています。よく日本語なら日本語の能力がある。英語なら英語の能力があるというふうに、頭の中の別々の箱にそれぞれの言語能力が入っているという捉え方をすることがありますよね。日本語は右脳で、英語は左脳でと、脳の別々のところでそれぞれの言語の能力が

働くんだという捉え方をすることもありますけど、実はそうではないのではないかという考え方です。つまり、複言語能力という考え方では、一つの言語はすごく能力が大きいんだけれども、他の言語ではすごく小さい能力しかない。でも部分的な能力はあるんだという言語能力の捉え方で、それらが一体化されて個人の言語能力だという考え方なんです。

２－２言語意識教育（P. 39, スライド 11）

さらに、そういった考え方を生かしながら、「言語意識教育」ということを実践、開発してきた人がいます。言語意識教育には、目的が 10 個あります。時間がないのですべてを読みませんが、要は二つの目的にまとめられます。一つ目はメタ言語能力と呼ばれるものです。これは、言語を使う能力だけではなくて、自分の中の言語能力というものを意識して、言語の機能であったり、言語の意味であったり、そういったことを意識する能力です。それともう一つは、言語の多様性に対する感受性と寛容性を養うことです。この二つが言語意識境域の大きな目的となります。

教材例：複言語能力を意識（P. 39, スライド 12）

この「言語意識教育」の教育実践の中で使われていた教材例が、今お手元にある資料です。これから 5 分くらい時間を取ります。色鉛筆があるでしょう。お見せする絵とはちょっと違う絵ですが、人の形の絵が描かれています。一体何をするかというと、自分の中にどんな言語があるかということをまず考えて、その「Language」と書かれたところに書いてみてください。自分の中にある言語です。私は日本語だけだと思うかもしれないけれども、方言でも、ちょっとだけでも聞いてわかる、話せる、読んでわかる、書ける、昔は知っていたという言語の言語名も書いてください。そしてそれぞれの言語が体のどの部分につながるか、これも考えてもらいたいと思います。例えばこれをちょっと見てください（スライドなし）。これはある商店街のとんかつ屋に入ったときにテーブルの上に置いてあったチラシです。この中に何言語ありますか？4 言語ありますよね。どれだけわかりました？例えば「すり鉢のごまをすり棒でする。ごまのつぶつぶが少し残る程度にすります。」日本語と同じことが別の言語でも書いてあります。これを読んで理解できますか。たぶん理解できる人もいますよね。日本語だけ理解できるという人もいるでしょうし、日本語と英語も大体わかるよという人もいると思います。中国語は無理だなと思うかもしれませんけど、中国語は話せない、聞いてもわからないけれども、見て部分的にわかる、ということはありますよね。これは韓国語です。わかる人もいるでしょうか。つまり、そういうものも全部挙げてください。言語を書いたら、色を考えてください。それぞれの言語をどの色で塗るかを考える。後からどうしてその色を選んだかという説明も、本来だったらしてもらうんですが、今日は時間がないので聞きません。では言語名を書いて、1 色だけでもいいから、色を塗ってみてください。どうぞ。

教材例：複言語能力を意識する実践（P. 40, スライド 13－14）

吉村氏：ちょっと書きにくいなと思っている人のために、中学校 1 年生の子が書いたものを一例だけ紹介、説明します（スライド 13）。この生徒は、日本の中学校 1 年生です。日本語が一番自分にとって大事だから赤色で顔の半分以上を占めています。英語はあまり好きじゃないから黄色とか。理由はどうでもいいんけど、英語は半分くらいあって、肩に長崎ってあります。手のところに韓国語がありますよね。足はペルシャ語ってあります。この生徒は一体どんな言語経験をしているんだと思いますか？実はこの生徒はお父さんがイラン人で、お母さんは日本人なのです。イランで使われる言葉はペルシャ語です。小さい頃お父さんとペルシャ語で話していたから、今はわからないけど昔はわかったし、使っていたらしいんです。今でもお父さんがペルシャ語で話すときには、少しは理解できるそうです。少ししか残っていないけど、自分の土台になっているような気がしているので、足のところにつけたということです。そういう説明をしてくれました。こういう感じで、みなさんも色を塗ってみてください。時間がないのでこのあたりで終わりますけど、もし興味があれば、自分自身の言語能力を認識するためにやってもらったらいいかなと思います。

複数の言語能力が並列して存在するのではなく、言語によって程度の異なる部分的な能力が重層的に統合されたものが複言語能力で、言語意識教育では、それを意識させるためにこの教材を使うんです。さきほどの重内先生がお話された、学習者として自分自身を特定する、言語学習をするうえで自分の言語能力というものをちゃんと特定するために使えるツールだと考えられなくもないなと思います。

新しい言語教育観から考える「グローバル人材」ということで、さきほど皆さんがしたワークをある現職の先生たちにしてもらいました。左と右の絵（スライド 14）は、ずいぶん違いますよね。右の図は小学校の英語の専科の先生が描いた絵です。8 年か 9 年教員をやっていて、英語の専科教員として子どもたちの英語の言語能力をつけるためにかなり活躍されている先生です。オーストラリアにも留学されているし、英語も使えます。その先生が書いたものが右側の図です。一方左側の図は多言語活動を外国語活動の中でやっている先生です。実は岸下先生です。岸下先生はこういう図を描いてくれました。すごいでしょう。この複雑な図です。日本語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、ネパール語、イタリア語。ポルトガル語もあります。これらの言語を全部同じように使えるのかというと、そうではなくて、部分的な能力だと思います。例えばあいさつだけでもたぶん描いておられるんだと思います。しかし、この図からは岸下先生ご自身がこんなに複雑な言語能力を意識されているということがわかります。

講演記録「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？：言語教育の視点から」

吉村 雅仁氏（奈良教育大学教職大学院　教授）

吉村氏：皆さん、こんにちは。奈良教育大学教職大学院の吉村と申します。現場の先生のお話ってすごいですよね。やはりパワフルだなと感じました。私の話では途中でワークを入れたり、それから、先ほどの先生方とのやりとりも挟みながら進めたいと思います。

まず今日の話の内容ですが、こういう順番で進めたいと思います。最初に「グローバル人材」という用語を、私たちは共通して使っていますが、きちんと定義しないと議論がバラバラの方向にいってしまうので、「グローバル人材」という言葉自体が一体どこから来たのかという話をします。文部科学省、中央教育審議会であったり、臨時教育審議会、それから経済産業省、といったいろいろなところから、この「グローバル人材」という言葉が使われるようになってきていますので、どのような経緯でそうなったのかという話を簡単にします。その次に、新しい言語教育観、言語教育、特に外国語学習について話します。言語というのは、できるだけその言語だけを使って勉強していけば身に付くよという考え方とは別に、最近、特にヨーロッパのいくつかの国で言われてきている言語教育観があります。それを紹介をしたいと思います。皆さんにもその教材を実際に使って体験をしてもらおうと思っています。その新しい言語教育観は複言語能力とか言語意識教育と呼ばれていますが、こういった言語教育観が「グローバル人材」というものに結びつくのではないかと私は考えるからなのです。そして、そういった新しい言語教育観から見て、「グローバル人材」というものがどのような能力を持った人かということについて、私なりの考えを述べたうえで、ではそのような「グローバル人材」を育成するためには教員としてどんな資質能力が必要になってくるのか、あるいは持つべきなのかという形で議論を進めたいと思います。

１．「グローバル人材」とは？

１－１．日本における国の「国際化」「グローバル化」「グローバル人材」の捉え方（P.37, スライド 3-5）

「グローバル人材」というのは、元々は文科省とか中央教育審議会とか、いろいろな政府の機関の中から国際化ということが議論され始めたことにさかのぼることができます。例えば臨時教育審議会の「教育改革に関する第４次答申」といったものの中で、これからの新しい国際化は、これまでの近代化の時代における国際化とは異なり、全人類的かつ地球的視点に立って、人類の平和と繁栄のために様々な分野において積極的に貢献し、国際

ういった「グローバル人材」としての態度、資質を持った人たちを育てようと思ったら、どんな力量を持っていなきゃいけないのでしょうか。一つの事例を示します。スコットランドには、学習指導要領のようなものに即した教員養成の指標「National Framework of Languages、言語教育のための枠組み」というのがあります。スコットランドの言語教育政策というのは、実はイングランドとは違って、小学校のときから自分の母語に加えて二つ言語を必ず学習させる、いわゆるワンプラストゥーと呼ばれる言語教育政策なんです。これは欧州評議会が出している言語教育政策と一緒です。でも、イングランドは違うんです。皆さんご存じのとおり、イギリスといっても一つではありません。ラグビーの試合を見ていたらわかったでしょう。イギリスというチームが 1 個出ているわけじゃありませんでした。あそこは独立性がすごく高いのです。スコットランドは特に教育に関する目標とか内容とかがイングランドとは相当違います。

そこでは教員の指標があって、言語教育のために指標に基づいて、教員にこういう能力をつけてもらおうという議論がなされたわけです。それが表 1 の「言語のための国家的枠組み：複言語主義と複言語識字能力」（スライド 17, P.16 の表 1 ）です。最上段には、「原理や文脈」書かれていますが、要するに態度とか価値観です。「原理や文脈」として「複言語主義」「多様性」「政策と法律」「変革的な実践」の 4 つが挙げられています。はっきりと「複言語主義」ということが書かれているんですね。この指標は、語学の教員だけを対象にしているのではありません。欧州、スコットランドでは、全ての教科が言語教育に当然含まれると考えられていますから、全ての教員がこの指標に示されたことを学んでいくということになります。つまり、教員の力量形成に必要なことの中に「言語教育の目標は複言語能力を伸ばしていくことだ」という共有意識があるわけです。そして「複言語主義」と並んで、非常に重要な理念として挙げられているのが「多様性」です。我々は言語的、文化的に多様な社会に生きています。この言語的・文化的多様性を認知し、尊重し、促進することは、複言語主義と複言語識字能力を支えるものとなるという価値も共有されています。さらに、これら 4 つの原理と文脈を「専門職的価値と個人的かかわり（取り組み）」「専門的知識・理解」「専門的技能と能力」の 3 点に分けて、より具体的に示しています。「専門職的価値と個人的かかわり（取り組み）」の中には社会的正義に関わることとして、例えば「個人が持っているまた新たに形成するアイデンティティにとって言語がどれほど重要であるかを理解する」ことなどが挙げられています。それから、「統合学習を変革する教育方法を開発する」ということも書かれています。これに関わることとして、「教育課程の横断的な学びにおける複数の言語の役割を促進する」とか「多様な言語や文化に対する態度及び行動の変容を伴う授業実践への変革的教授法を開発する」ということなどが挙げられています。教員個人の取り組みとして「CEFR の原理に沿って個人の言語技能を発達させ維持する」という言語の技能ということが書かれています。詳しい説明はしませんが、この国家的枠組みでは、「専門的知識・理解」や「専門的技能と能力」の部分に言語教育に必要な知識や技能についても具体的に記述されています。

４－２．“MY LANGUAGES PROFILE –A REFRECTIVE TOOL FOR TRAINEE TEACHERS-”（P. 41, スライド 18）

この国家的枠組みに基づいて、教員養成課程の中で使われるポートフォリオも開発されています。教員志望者のためのポートフォリオもちゃんと用意されているんです。奈良教育大学の学生さんはみなさん、電子ポートフォリオを使っていますよね。あれに相当するものです。この中に、教師としての専門的能力の振り返りをするための項目がずらっと並んでいるんです。奈良教育大学の場合、カリキュラムフレームワークと呼ばれているものです。教員として、どんな資質能力を身に付けたらいいかという一覧がありますね。それに相当するものがこの「My language profile」です。

４－３．“MY LANGUAGES PROFILE –A REFRECTIVE TOOL FOR TRAINEE TEACHERS-”を使った教師としての専門的能力の振り返り（P. 41, スライド 19-20）

実は「My language profile」の振り返りのためのリスト（P.17 の資料１）で、岸下先生とさきほどの英語の専科の先生に自己評価をしてもらいました。左側のＡが岸下先生で、右側の Ｂ が英語専科の先生の回答です。岸下先生と英語専科の先生で差がある項目があります。岸下先生の自己評価は高いけれども、英語専科の先生は低いという差があるところがピンクと黄色で示されています。通常の英語を担当する先生と、多様な言語とか文化とかを取り入れようとする岸下先生との違いが、実はこの赤い枠が込みのところだと想像されるわけです。例えばここは、この枠組みの中に差があるところが三つありました。まず、文化に関わる部分です。どういうことか。例えば、学習者の異文化に対する気付きを促進するような活動をちゃんと評価し、それを選択していくことができる能力、つまり、異文化理解とか言語観の違いをきちんと教材として選んで、それを使っていくことができるかどうか、という項目について２人の先生に違いが見られました。さらに、個々の子どもたちのニーズをきちんと考慮して教育活動を展開しているかという項目についても二人には違いが見られました。これはさきほどの外国籍児童の話にもつながってくるのですが、全ての児童の個々のニーズというものをきちんと自分の教育活動の中に入れられるかどうかという点が違うんです。この項目について岸下先生は ４ 点、英語専科の先生は１点という自己評価の違いが見られました。さらに、Cooperating with others、つまり、いろいろな人たちと協力するかどうかという項目についてです。人とのネットワークをちゃんと実行できるかどうか、それを有効活用できるかどうかという点で、二人の先生には違いがあります。

４.「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力（P. 42, スライド 21）

これらのことを考えると、結局こういうことになるかと思います。グローバル人材育成につながる教員の資質能力として、言語教育から捉えると、資質としては、自己および他者の言語的・文化的レパートリーを意識、尊重し、絶え間なくレパートリーを増やしなが

ら、相互理解・共生を目指そうとする「開かれた態度・価値」が必要だと言えます。絶え間なくレパートリーを増やすというのは、ちょっとだけでもいいからいろいろな言語を学び続けようということです。相手が知らない言語でもどんどん積極的に使っていって、相手にも学んでもらおうという、絶え間なくレパートリーを増やしながら、相互理解、共生をめざそうというゴールの設定です。相手のことを理解して自分を伝えたいという態度・価値のことです。そういう開かれた態度・価値を当然教員も持っておく必要があろうということです。さらに、能力としては、特に言語・文化的多様性を取り入れた教育活動や児童生徒個々のニーズを考慮した教育活動を行う能力が必要でしょう。さらに、他者、保護者、同僚、専門家などと協力する能力というのもおそらくは必要になるかと思います。

各都道府県における教員育成指標（P. 42, スライド 22–24）

このような能力が、日本において、果たして教員の育成指標の中に取り入れられているのかということを調べてみました。現在、多くの都道府県教育委員会が、教員の育成指標をつくっています。それら育成指標のうち、例えば多様性の理解や対応というものを具体的に扱っている都道府県は非常に少なく、私が調べた限りでは、愛知と横浜にしかありません。例えばこれは愛知県が作成した教員育成指標（スライド 23-24, https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/252498.pdf 参照）です。一番左、つまり最初は大学卒業レベルですが、右へ行くほどだんだん教員としてのキャリアステージが上がり、専門性が高くなっていきます。それぞれのキャリアステージに応じて、実際に教育現場に入って、こういうことができるようになるという目標が設定されています。「指導力」の中には「多様性への理解と教育支援」という項目があって、着任時には特別支援教育、外国人児童生徒教育など特別な支援を必要とする児童生徒に対する教育の基礎的な知識を身に付けていることが求められています。「教員としての基盤を固める」第 1 ステージ段階では、実践を通して児童生徒の多様性への理解を深めるとともに、多様性を生かした教育活動を実践しようとするとか、さらに上の第 2 ステージになると、児童生徒の多様性に応じるため、関係諸機関や専門機関などとの連携を推進する。それから、さらに第 3 ステージにいくと、人権や個々の価値観を大切にする教育の推進者として、経験の浅い教職員の相談や助言を行うというふうに、キャリアステージに応じて、段階的に多様性に関わることを教員の資質能力として具体的に載せています。これが愛知です。おそらく愛知県というのは、日本の中で東京に次いで外国籍児童・生徒が多いところだと思います。だから、教員もそこに配慮せざるを得ないという事情は当然あります。あるけれども、これから 5 年後、10 年後になってくると、そのような状態がどこの都道府県でも起こる可能性が高いと思われます。

５．おわりに（P. 43, スライド 25–26）

終わりに、特に大学生のみなさんに、今できることをお話したいと思います。教員志望の皆さんは、「グローバル人材なんて自分と全然関係ないよ」と思わず、まずは身近な「グローバル化」を意識してみましょう。奈良教育大学の中にも留学生がいます。奈良公園に行ってみてください。あるいは、東向き商店街を歩いてみてください。どんな言語が聞こえるか、まずそれを感じてほしいと思います。どれくらい自分とは違う言語を使う人たちがいるのかということをまず知ってほしいと思います。

実はそのようなことに興味・関心を持つということが、企業が求めるグローバル人材にも結びついています。これは、日本経済団体連合会が 2015 年に行った、グローバル事業で活躍する人材に求める素質、知識・能力に関するアンケートの結果です。最も上位になったのは、「海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する姿勢」です。これが一番上にランクされています。つまり、異文化あるいは価値観の違いに興味・関心を持つところから始めるとよい、ということです。それができれば、もうすでにあなたは「グローバル人材」かもしれません。さらに、教員として、自身の言語的・文化的レパートリーを増やすこと、地球規模的な視点を身に付けること、自分たちを発信しようとすること、そしてそれを児童生徒にも期待することなどが次の課題となっていくと思われます。ありがとうございました。

＜出典＞

P.16【表 1 】

吉村雅仁・アンディ ハンコック（2019）「スコットランドにおける言語教育と教員に求められる資質能力－教員としての専門職基準と言語のための枠組みを中心に－」『次世代教員養成センター研究紀要』5, pp.141-150

P.17【資料 1 】

Yoshimura, M. and Kishishita, T. (2020) “A Study on Teacher-led Multilingual Activities in a Primary School in Japan: From a Viewpoint of Plurilingualism and Language Awareness”. Bulletin of School of Professional Development in Education (SPDE), Nara University of Education, Vol.12 (in press).

質疑応答

参加者：熊谷先生に質問です。今日はありがとうございました。IB でクリティカルシンキング、批判的思考力ということがいわれていると思うのですが、IB 自体を批判的に見たときに、今の状況でまだ足りていない点、課題はありますか？

熊谷氏：ありがとうございます。このプログラムの取組み方、学習や評価のアプローチの仕方は特徴的だということはもちろん皆さん知っていると思います。でも、そうは言っても教科という枠組みで評価されるという点では同じです。また、内部評価は最終的な評価に一部加えられるものの、大部分は最終的に行われるペーパー試験によって評価が決定されます。例えば大学入試においては、センター試験というのを多くの受験生が受けますが、その、その場 1 回限りの試験の点数によって、大学に行けたり行けなかったりが決まると思います。IB も同じです。5 月もしくは 11 月に試験があります。インターナショナルスクールなど、9 月始まりの学校に関しては、5 月に試験を受けます。日本のように 3 月とか 4 月始まりの国においては、11 月に約 3 週間にわたって子どもたちは試験を受けるのですが、結局その試験の成績で、子どもたちのディプロマの点数が決まっていきます。1 回限りの点数で、子どもたちの学力というのが決定されてしまうというシステムそのものは IB でも同じなのです。どんなにアプローチの仕方が問題解決型であろうと、クリティカルであろうと、クリエイティブであろうと、そのシステム自体はスタンダライズドテストとまったく変わりがないので、じゃあ本当の意味でこれからの「グローバル人材」を育てていくというのにふさわしい評価法なのか、というところは疑問に思うときもあります。

司会：ありがとうございました。時間を過ぎてしまいましたので、本当に残念ですが閉会としたいと思います。本日の 3 組の先生方の教育現場の実践から熱いメッセージを受け取ったのではないかと思います。また吉村先生のご講演では、言語教育という視点から捉えた「グローバル人材」ということで、言語的・文化的多様性、心を開くというお話がありました。言語的・文化的多様性というのは、外国人であるとか、それから海外での経験ということだけをさすのではないと思います。同じ日本人でも多様であり、違うなということもいろいろあると思いますし、日本国内での経験の中でも、多くの場面で多様な価値観への関心や興味、レパートリーという視点を持つことが可能なのではないかと思います。私が一番感銘を受けたところは、先生方が教員になった後も実践の現場でいろいろな葛藤を抱えながら日々挑戦されているところです。これから教員になろうとしている皆さんにも、そして私自身にも、学ぶべき点なのではないかと思います。ご登壇の先生方、ありがとうございました。

表1： 言語のための国家的枠組み：複言語主義と複言語識字主義

原理と文脈

複言語主義	多様性	政策と法律	変革的な実践
言語教育の目標は複言語主義―すなわち二つ以上の言語を適切に使用する能力―である。言語使用は、言語学習を含むものであり、複数の言語を識字能力と関連づけることすなわち複言語識字能力をも含むものである。	我々は言語的・文化的に多様な社会に生きている。この言語的・文化的多様性を認知し尊重し促進することは複言語主義と複言語識字主義を支えるものとなる。	複数言語や識字の学習及び教授は、複言語主義や複言語識字主義のための欧州並びに地球的目標と融合するスコットランドの国家政策や指針に沿うものである。	複言語主義と複言語識字主義は全ての学習者のためになる。この知識に教室を批判的・創造的に変革する。変革的な実践によって個々人は自分自身や他者をどう見るのかまた社会にどのように関わり貢献するのかを考える気になるのである。

専門職的価値と個人的かかわり（取り組み）

社会的正義ー差違性の尊重と促進
- 子どもたちが日常生活で使う全ての言語及び彼らが学習を望むすべての付加的な言語を尊重する
- 複言語識字主義と多文化主義を通じて複言語主義の発展を促進する
- 個人が現在持っているまた新たに形成するアイデンティティにとって言語がどれほど重要であるかを理解する

統合ー学習を変革する教育法を開発する
- 言語や文化に影響を与える「現実世界」の諸問題に対して心を開き率直になる
- （複数の）言語と識字能力の間に明快な関連性を持たせる
- 教育課程横断的な学びにおける（複数の）言語の役割を促進する
- 多様な言語や文化に対する態度及び行動の変容を伴う授業実践への変革的教授法を開発する
- 第一言語が付加的言語学習にどのように関係しているかあるいはその逆について理解している

信頼と尊重ー相互信頼・相互尊重の文化を構築する
- 学習者の現在の言語能力・経験を認知する
- 学習者個々の社会的、文化的そして言語的共同体を尊重する
- 言語に対する個人のニーズや希望に応じて積極的に働きかけることが基準となるような状況を創り出す

個人的かかわり（取り組み）
- 言語学習に対する肯定的な気質を創造する
- 児童生徒を動機付け彼らの自信を喚起させるような一連の教授法を用いる
- 地球市民性及び持続性を促進する過程において言語学習が果たす役割を理解している
- 言語学習の持つ認知的・社会的・文化的利益を促進する
- （複数の）言語が学習への障壁をどのように取り除くかを明らかに示す
- 学習の達成度を高めるのに言語がどのような役割を果たすかを認識している
- 言語学習者及び使用者がどのようなものかを経験している
- 言語技能の学習、発達、使用、維持の方法を理解している
- CEFRの原理に沿って個人の言語技能を発達させ維持する

専門的知識・理解

教育課程ー教育課程への意識と理解を構築し、変革的な実践を計画する
- 異なる文脈で言語がどのように学習されるかを理解している
- 学習に対する言語や識字能力の役割を理解している
- 全ての言語や文化に対して肯定的な態度を育成する
- 教育課程内での変化や発達を支える教授学習を計画する
- 言語や言語学習が教育課程内及び横断的にどのように統合され得るかを知っている
- 言語及びそれに関連する技能や理解を促すために、デジタルそしてオンラインツールを含む多様な教材をどのように使うかを知っている

教育制度と専門的責任ーより広い学習共同体における教育制度と専門職としての責任を理解している
- 教育課程横断的に間文化的気付きを促すような教育実践を開発する
- 変革的実践を導き複言語主義や複言語識字主義を促進するための基盤となる理論を理解し応用する
- より広い共同体での学びを促進する言語的資源を利用する

教授法理論と実践ー変革的実践を発達させる教育原理と理論の知識基盤を開発・拡充する
- 変革的な教育実践を計画する際、児童生徒の社会的、文化的、言語的背景を考慮する
- 変革的授業実践をさらに導き、発展させ、維持するための教育的研究に（批判的に）従事する
- 変革的実践を最新の教育的優先課題と結びつける
- 言語学習及び使用が、どのように個人の（認知的、情緒的、社会的、身体的）ニーズを支えるかを理解している

専門的技能と能力

教授と学習ー全ての学習者のニーズと能力に見合う変革的実践を用いる
- 学習の障害を取り除く広範囲の言語及び言語学習方略を検討する
- 異なる熟達度にある多様な学習者のための識字能力及び口頭技能に関する高い基準を計画・促進する
- 複言語的な実践や学習者アイデンティティを包摂する広範囲の戦略や教材を利用する

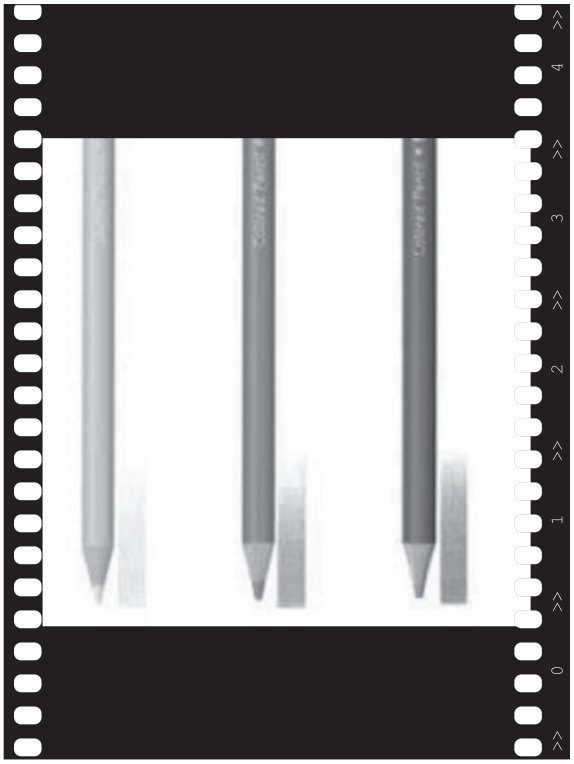
学級組織と経営ー刺激的な学級環境を創造する
- 第1言語が何語かによらず、学習者の社会的·文化的·言語的ニーズを特定する
- 多様な社会的、文化的、言語的文脈を利用した包摂的な授業を計画する
- 民族、言語、文化の差違を考慮しながら、全ての学習者の間文化的能力を関連させる
- 全ての学習者のために安全かつ多様で肯定的な言語環境を創造する

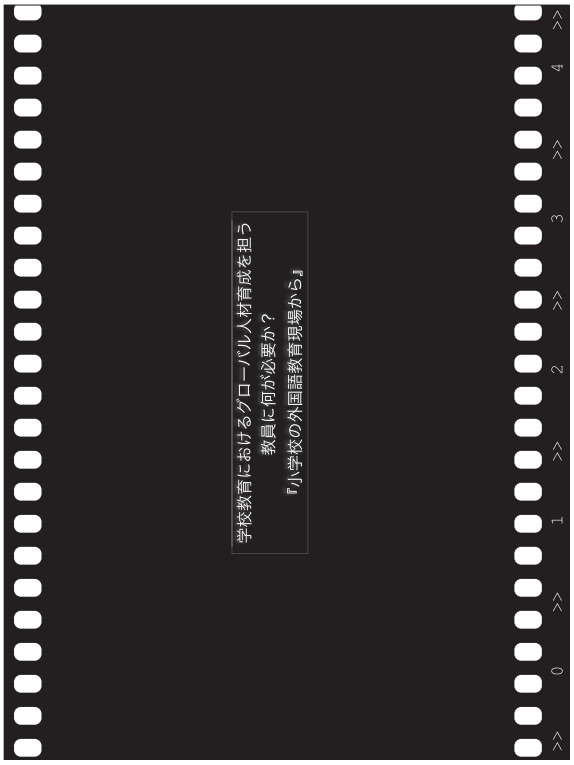
学習者評価
- 複言語主義や複言語識字主義に向かう学習者個人の成長を評価するために多種多様な形成的、総括的評価を用いる

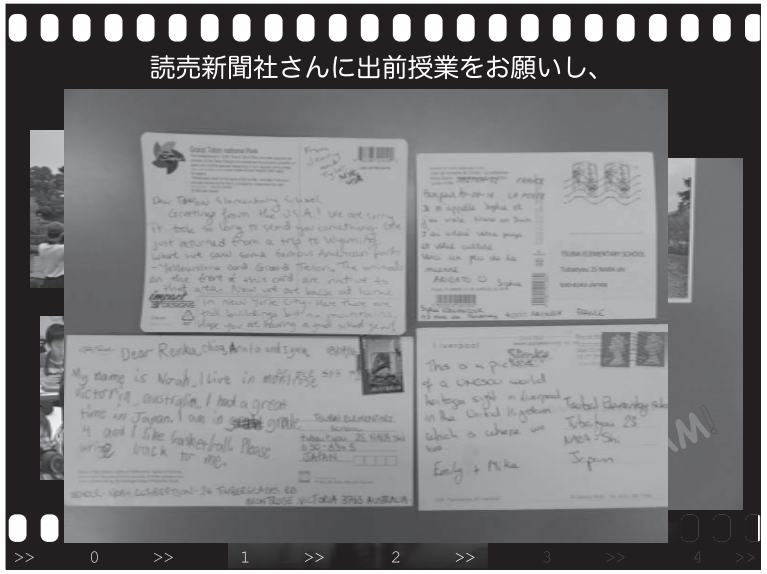
専門職としての振り返りとコミュニケーションー政策、理論および実践に関する
- 国家的国際的な政策の役割とこれらがどのように複言語主義や複言語識字主義を支えられるかを理解する
- 言語、識字および間文化的能力に関連する国家的国際的な政策や指針に関する批判的理解を発達させる（職能発達及び成長のために）
- 振り返りおよび授業改善のために言語教育の分野における革新的な取り組みにかかわる
- 同僚と協働し諸機関を支援しつつ、複合領域的、複眼的な実践を開発する

【資料１】 RESULTS OF SELF ASSESSMENT IN *MY LANGUAGES PROFILE*		A	B
A. Adapting to the context			
A. Responding positively to linguistic and cultural diversity:			
	i. I can respond positively to linguistic and cultural diversity and treat the fact that some children are plurilingual and have experience of different cultures as a real resource for the group.	4	3
	ii. I can encourage learners to relate the target language to other languages they speak or have learned.	4	3
	iii. I can take account of the emotional dimension in linguistic exchanges with and between the children.	4	3
	iv. I can understand the personal, intellectual and cultural value of learning other languages.	4	3
B. Organising activities on the theme of language and diversity:			
	i. I can guide the children in their encounters with different linguistic or cultural behaviour and encourage them to talk about the subject.	4	2
	ii. I can draw maximum benefit from the moments when the children start to become aware of the workings of the language.	4	1
	iii. I can relate the language I am teaching to the culture of those who speak it.	4	3
	iv. I can take into account the cognitive needs of learners (communication, problem solving etc.)	4	4
C. Supporting the linguistic development of children with other first languages:			
	i. I can take account of the specific situation of children with other first languages in order to identify their individual abilities and needs.	4	3
	ii. I can help children to draw on their first language in order to make progress in acquiring the language used for exchanges within the group.	4	1
D. Working as a team:			
	i. I can contribute to an effective exchange of practices and ideas between team members.	4	2
I can also…			
B. Planning the learning experience			
E. Theoretical and curricular context:			
	i. I can understand the requirements set in national and local curricula (Es and Os (Experiences and Outcomes), benchmarks etc.)	2	3
	ii. I can understand and integrate the content of European documents (eg. CEFR, ELP) as appropriate in my teaching.	2	1
	iii. I can draw on appropriate theories of language learning, culture etc. and relevant research findings to guide my teaching.	4	2
F. Culture:			
	i. I can evaluate and select a variety of texts, source materials and activities which awaken learners' interest in and help them to develop their knowledge and understanding of their own and the other language cultures (cultural facts, events, attitudes and identity etc.)	4	2
	ii. I can evaluate and select a variety of texts, source material and activities which help learners to reflect on the concept of 'otherness' and understand different value systems.	4	1
	iii. I can evaluate and select activities which enhance the learners' intercultural awareness.	4	1
	iv. I can plan activities to ensure the interdependence of language and culture.	4	1
G. Lesson content:			
	i. I can identify curriculum requirements and set learning aims and objectives suited to my learners' needs and interests.	4	4
	ii. I can set objectives which encourage learners to reflect on their learning.	4	3
	iii. I can structure lesson plans and/or plan for periods of teaching in a coherent and varied sequence of content.	4	3
	iv. I can plan activities to ensure the interdependence of listening, speaking, reading and writing.	4	4
	v. I can plan to teach elements of other subjects using the target language (cross- curricular teaching, CLIL etc.)	4	2
H. Resources:			
	i. I can identify and evaluate a range of coursebook/materials appropriate for the age, interests and language level of the learners.	4	3
	ii. I can design learning materials and activities appropriate for my learners.	4	4
I can also…			
C. Creating a favourable learning environment			
I. Talking to children in the classroom:			
	i. I can tell whether the language I am using is well adapted to the abilities and needs of the children in this age group.	4	4
	ii. I can react effectively and use a variety of strategies when the children do not seem to understand everything I am saying to them (including in the target language).	4	4
	iii. I can make each child feel involved in the discussion.	4	4
	iv. I can conduct a lesson in the target language.	4	3
	v. I can decide when it is appropriate to use the target language and when not to.	4	4
	vi. I can encourage learners to use the target language in their activities.	4	3
	vii. I can present language content (new and previously encountered items of language, topics etc.) in ways which are appropriate for individuals and specific groups of learners.	4	3
	viii. I can evaluate and select a variety of activities which help learners to learn vocabulary.	4	4
J. Organising the lesson:			
	i. I can encourage the children to use non-verbal communication to support oral expression.	4	4
	ii. I can make use of each activity in order to foster the children's language development.	4	3
	iii. I can select from and plan a variety of organisational forms (frontal, individual, pair, group work) as appropriate.	4	4
	iv. I can start a lesson in an engaging way.	4	2
	v. I can be flexible when working from a lesson plan and respond to learner interests as the lesson progresses.	4	3
	vi. I can ensure smooth transitions between activities for individuals, groups and the whole class.	4	4
	vii. I can time classroom activities to reflect individual learners' attention spans.	4	3
	viii. I can finish off a lesson in a focused way.	4	2
	ix. I can stimulate children's curiosity about writing.	4	2
	x. I can help develop each child's confidence in the use of languages.	4	3
	xi. I can cater for a range of learning styles.	4	2
K. Developing receptive skills:			
1. Reading:	i. I can select texts appropriate to the needs, interests and language level of the learners.	4	3
	ii. I can provide a range of pre-reading activities to help learners to orientate themselves to the text.		
	iii. I can encourage learners to use their knowledge of a topic and their expectation about a text when reading.		
	iv. I can apply appropriate ways of reading a text in class (eg. aloud, silently, in groups etc.)		
	v. I can introduce, and help students to deal with, new or unknown items of grammar in a variety of ways (teacher presentation, awareness-raising, discovery etc.)		
2. Listening:	i. I can select texts appropriate to the needs, interests and language level of the learners.	4	3
	ii. I can provide a range of pre-listening activities which help learners to orientate themselves to a text.		
	iii. I can encourage learners to use their knowledge of a topic and their expectations about a text when listening.		
	iv. I can design and select different activities in order to practise and develop different listening strategies (listening for gist, specific information etc.)		
L. Developing productive skills:			
1. Speaking:	i. I can evaluate and select meaningful speaking activities to encourage learners of differing abilities to participate.	4	3
	ii. I can evaluate and select meaningful speaking activities to encourage learners to express their opinions, identity, culture etc.		
	iii. I can evaluate and select a variety of techniques to make learners aware of, discriminate and help them to pronounce sounds in the target language.		
2. Writing:	i. I can evaluate and select meaningful activities to encourage learners to develop their creative potential.	3	2
	ii. I can evaluate and select texts in a variety of text types to function as good examples for the learners' writing.		
	iii. I can help learners to gather and share information for their writing task.		
	iv. I can introduce a grammatical item and help learners to practise it through meaningful contexts and appropriate texts.		
I can also…			
D. Observing and supporting each child' s development			
M. Taking children's individual needs into account:			
	i. I can identify each child's communication skills and language needs using appropriate observation instruments.	3	2
	ii. I can help each child progress at his/her own pace.	4	3
	iii. I can guide and assist learners in setting their own aims and objectives in planning their own learning.	4	1
	iv. I can identify strengths and areas for improvement in a learner's performance.	4	2
N. Assessing for learning:			
	i. I can evaluate and select valid assessment procedures (tests, portfolios, self- assessment etc.) appropriate to learning aims and objectives.	3	3
	ii. I can design and use in-class activities to monitor and assess learners' participation and performance.	4	3
	iii. I can help learners to monitor, reflect on, edit and improve their own speaking and writing.	4	2
	iv. I can use peer assessment and feedback to assist the production of spoken and written language.	3	2
	v. I can analyse learners' errors and identify the processes that may cause them.	3	3
	vi. I can provide constructive feedback to learners concerning their errors.	4	4
O. Cooperating with others:			
	i. I can exchange information with the children's families about their progress.	4	1
	ii. I can accept remarks, queries and advice from colleagues or teacher educators and take them into account in my management of the group.	4	4
	iii. I can provide colleagues or secondary school teachers with useful information about the linguistic development of the children for whom I am responsible.	4	3
P. Evaluating and reflecting			
	i. I can evaluate and select a variety of activities which help learners to reflect on their existing knowledge and competences.	4	2
	ii. I can critically assess my teaching on the basis of experience, learner feedback and learning outcomes and adapt it accordingly.	3	2
	iii. I can use the process and results of assessment to inform my teaching and plan learning for individuals and groups (ie. formative assessment).	4	1
I can also…			

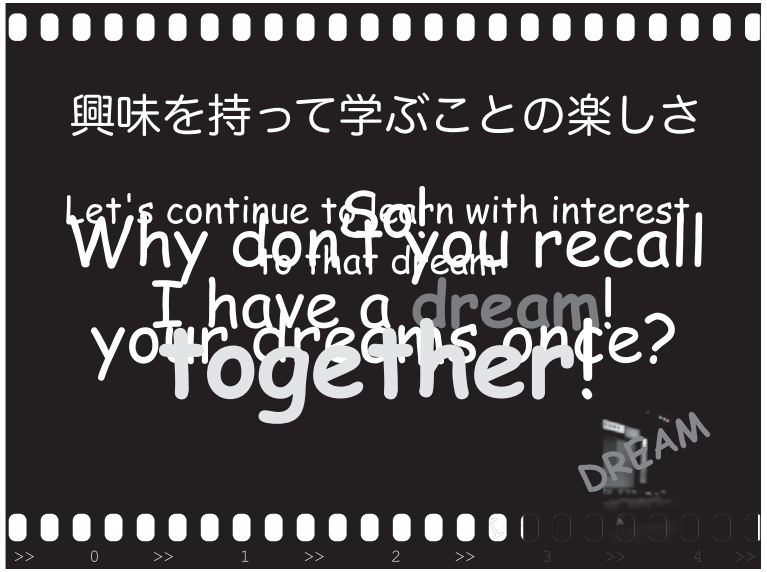
●話題提供①「小学校の外国語教育の現場から」

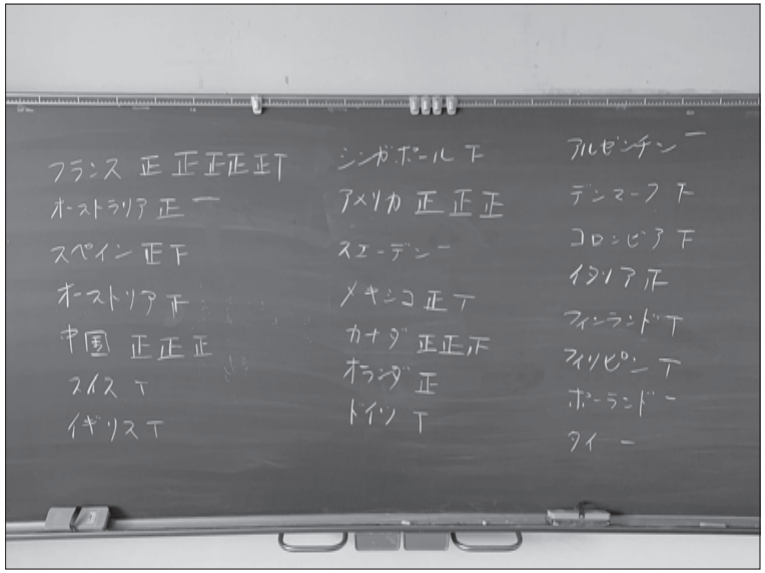


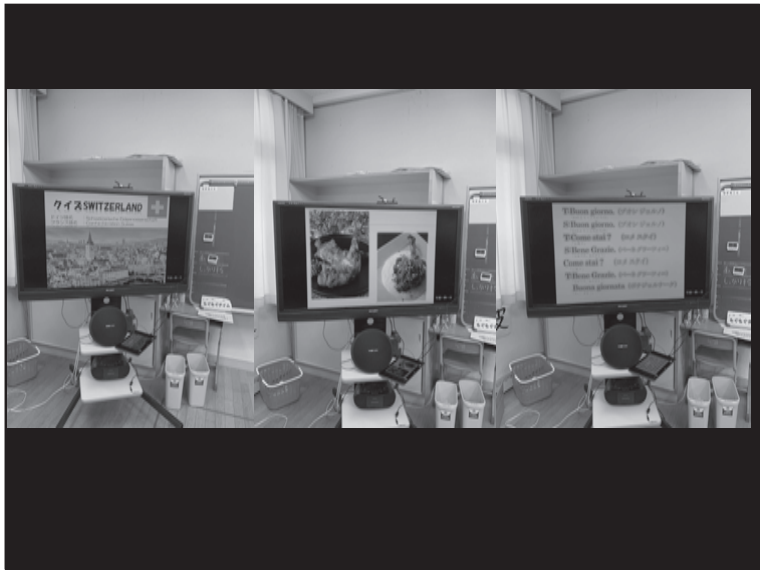


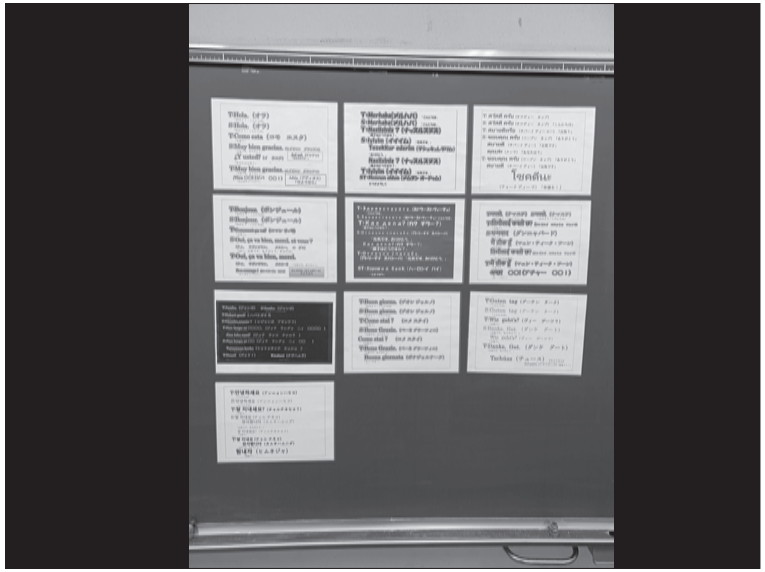

読売新聞社さんに出前授業をお願いし、

好きこそものの上手なれ


興味を持って学ぶことの楽しさ
Let's continue to learn with interest
Why don't you recall your dreams once?
I have a dream!
Go to that dream
together!







総合

自分たちの町の世界遺産学習

自分たちの住んでいる町を行脚 → 世界遺産がたくさんあることを再認識

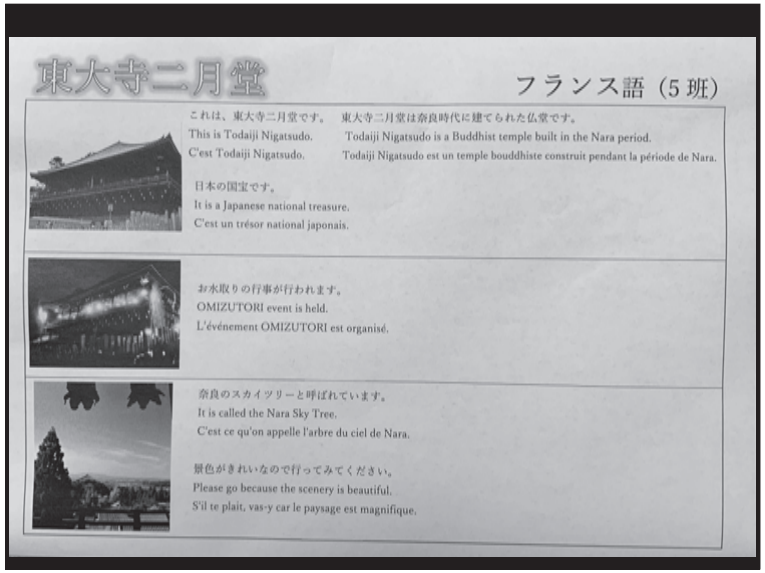
↓

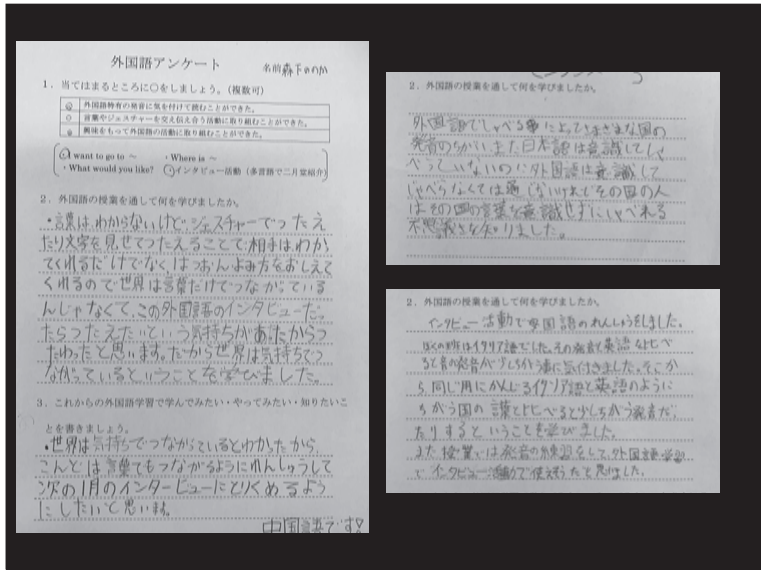
後世に残していくためには？！ → 伝えていく

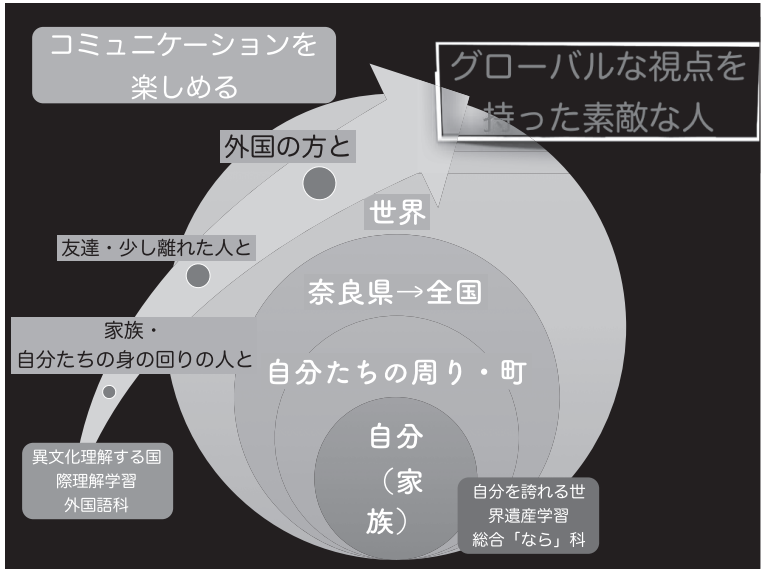
↓

誰に

周りにいる人はもちろん、奈良に観光に来た外国人に知ってもらえば世界にも広がっていくのではないか！？


東大寺二月堂
フランス語（5班）
これは、東大寺二月堂です。
This is Todaiji Nigatsudo.
C'est Todaiji Nigatsudo.
東大寺二月堂は奈良時代に建てられた仏堂です。
Todaiji Nigatsudo is a Buddhist temple built in the Nara period.
Todaiji Nigatsudo est un temple bouddhiste construit pendant la période de Nara.
日本の国宝です。
It is a Japanese national treasure.
C'est un trésor national japonais.
お水取りの行事が行われます。
OMIZUTORI event is held.
L'événement OMIZUTORI est organisé.
奈良のスカイツリーと呼ばれています。
It is called the Nara Sky Tree.
C'est ce qu'on appelle l'arbre du ciel de Nara.
景色がきれいなので行ってみてください。
Please go because the scenery is beautiful.
S'il te plait, vas-y car le paysage est magnifique.


外国語アンケート
名前 森下 めの加
1．当てはまるところに○をしましょう。（複数可）
② 外国語特有の発音に気を付けて読むことができた。
③ 言葉やジェスチャーを交え伝え合う活動に取り組むことができた。
④ 興味をもって外国語の活動に取り組むことができた。
・I want to go to ～
・What would you like?
・Where is ～
⑤インタビュー活動（多言語で二月堂紹介）
2．外国語の授業を通して何を学びましたか。
・言葉はわからないけどジェスチャーでったえたり文字を見せてったえることで相手はわかってくれるだけでなくほほえんだ顔をおしえてくれるので世界は言葉だけでつながっているんじゃなくてこの外国語のインタビューでったえたいという気持ちがあったからつたわったと思います。だから世界は気持ちでつながっていることをまなびました。
3．これからの外国語学習で学んでみたい・やってみたい・知りたいことを書きましょう。
・世界は気持ちでつながっているとわかったからこんどは言葉でもつながるようにがんばりたいです。次の1月のインタビューにとりくめるようにしたいです。思います。
中国語です。
2．外国語の授業を通して何を学びましたか。
外国語でしゃべる事でたくさんな国の発音のちがいまた日本語は意識してしゃべっていない外国語は意識してしゃべらなくては通じないけれどその国の人はその国の言葉を意識せずにしゃべれる不思議さを知りました。
2．外国語の授業を通して何を学びましたか。
インタビュー活動で母国語のれんしゅうをしました。
次の班はイタリア語でした。その発音英語などとくらべる発音がちがう事に気付きました。そこから同じ用にAVしるイタリア語と英語のようにちがう国の語とヒベるとちがう点だ、ありまるということを学びました。
また授業では発音の練習をしてから外国語学習でインタビュー練習で使えたと思いました。


コミュニケーションを楽しめる
グローバルな視点を持った素敵な人
外国の方と
世界
友達・少し離れた人と
奈良県→全国
家族・
自分たちの身の回りの人と
自分たちの周り・町
自分
（家族）
異文化理解する国
際理解学習
外国語科
自分を誇れる世界遺産学習
総合「なら」科

学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？『小学校の外国語教育現場から』

岸下　哲史・大形　憲治

○GLOBA L 人材の育成の第１歩としての学習活動

スライドの冒頭でのスピーチにおいて、児童は次の言葉を口にしている。

A：CHALLENGE SPIRIT

B：興味を持って学ぶことの楽しさ

C：好きこそものの上手なれ

D：I have a dream! と夢を語れる。

私自身が学習活動を進める上で常に大切にしてきたことそのものである。

A：CHALLENGE SPIRIT

「とにかくやってみよう！」そんな思いにさせる言葉かけをどれだけ持っているのか。それは教員にとっては大切なことである。そしてそれ以前に、どのような仕掛けをばらまいておくかが大切である。

今回はグローバル人材の育成という視点で論点を絞ると、例えば日々の生活の中で海外に目を向けることの楽しさや、場の設定を行うことである。

一つ実践を挙げるとすると、廊下の一角に少し広いスペースがあり、そこに WORLD SPACE と称した BOOK SPACE を設けた。そこに置いた本は世界に関する本。ジャンルは様々ではあるが、“世界中の美しい景色”から“○○会話ブック”まで様々。今まで図書室に置かれたことのないような本を多数おいた。そこにテーブルとベンチを置いたことで、休み時間にはそれらの本に触れ、世界の風を感じ、世界へ目を向ける機会となった。

このような仕掛けを、意図的に多数設けることで、児童は自然と世界への興味が“CHALLENGE SPIRIT”と変化していったと感じている。

B：興味を持って学ぶことの楽しさ

「Be fun!」と「Be interesting！」は大きく違う。そこに何の違いがあるというと、それば文字通り、inter なのかどうかである。さてではその inter とは何か。それこそ、“生きる学び”であることである。自分が取得した言語能力を生かし自らのことを伝え、更なる知識や見識を学ぶ。この往還的なやりとりこそが、椿井小学校で行なってきた教育活動、inter→view“インタビュー学習”である。

まずは自分たちの文化や事柄（inter）を示す（view）。その後相手に尋ねる。その後、その知り得た知識や見識を元に、自分たちとの違いや、相手がさらに興味を持ってくれるような(inter)は何かと探求する。ことわざに“他国を知って　自国を知る”といった言葉があるように、まさにこのような学びを通して、児童は他国にも、自国にも、そして何より自分にも興味を覚え学びを深め、自分自身を知る＝自信となる。

“人生とは自分探しの旅”とすれば、自分自身をこのように知れることに、興味を持って学べないことはない。楽しいものである。

C：好きこそものの上手なれ

逆説で考えたとき、“嫌いこそものの下手なれ”が当てはまるのか。その通りである。ではなぜ嫌いなのかを突き止め、考えれば答えは出るはずである。そしてこの過程で答えを導き出すとすれば、ワクワクするような学びの場になっていないということである。ではワクワクするような学びとは。

自分たちが選んだ言語を使い“漫才”をする活動を行ったことがある。すると今までは英語が苦手だった児童も、大変意欲的に取り組んだ。それはなぜか？

漫才とはボケとツッコミの連続で笑いを取るものである。最近ではこの垣根は取り払われてきている

部分もあるが、ツッコミだけ漫才を構成することは不可能であり、ボケがなければ笑いは取れない。

要は漫才と同じで、ボケ＝間違い・勘違いがなければ笑いは成立しないのである。これが漫才を、多言語学習に取り入れる一番の要因である。

今まで英語が苦手だった子も、間違いを気にせず、むしろ間違った方がおいしい笑いを取れることで、自分が生かせられる。そんなところから、熱心に漫才のネタ探しに取り組んだ。

そう、日本の教育全般に蔓延っている、

“できない”＝“きらい”を

“できない”＝“わらい”に、、、、、、、変えられる魔法の取り組みなのである。そして、英語が好きではなくても、漫才が好きという力を借りて、学習意欲の向上につなげる。

D：I have a dream! と夢を語れる。

６年間の学びの最後に、自分が選択した言語で夢を語る。コンテスト形式で毎回優勝者の言語は変わる。１回目はギリシア語、２回目はインドネシア語。スピーチを始める前に、簡単に言語の特徴を話す。「ドイツ語の特徴は、ウムラウトと言って日本にはない発音があって、、、、、、。」等である。聞き手は当然自分が選択した言語なら意味は何とか理解できるのかもしれないが、この説明を聞いて、その特徴が感じ取れるかを判断基準にスピーチを聞く。これがいいのだ。分からないから、話す方も堂々と話せる。自分しか選択していなければ尚更のことである。

そして何より、世界の中の日本（社会）や他教科で世界のことを学ぶこどもたちにとって、目を向けた国の言語を学べる機会があることは、興味もない英語で、また優劣がはっきりする英語で話すことより、“夢を語りたい！”という気持ちが増すのは当然の結果である。

このような取り組みの中で、椿井小学校の児童は学校目標である“世界にはばたく　世界で活きる　椿井っこ”として下に示すように、同心円状にグローバルな視点を広げ巣立っていく。

〇カリキュラムマネジメントについて　～インタビュー学習の具体的な進め方～

本校では、外国語科と総合「なら」科等のカリキュラムをマネジメントし学習を進めてきた。

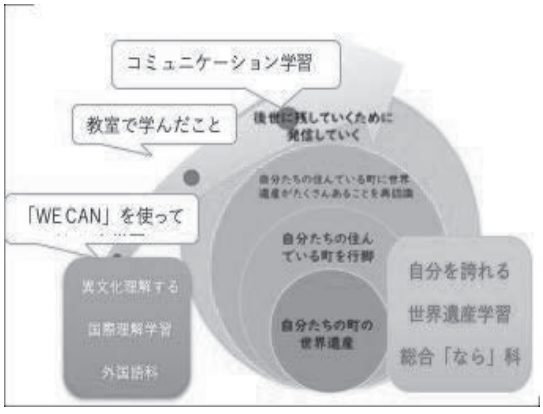
自分自身のことを知ることによって、周りへの理解が深まる。同じように自分自身の住んでいる町に興味・関心をもち、そこから世界へと広がっていく。

総合「なら」科で、「自分たちの町にある大切なものを後世に残していくには。」という課題に主体的に「世界の色々な人に伝えていきたい。」という気持ちを持てることを指導目標とし、教育活動を進めてきた。

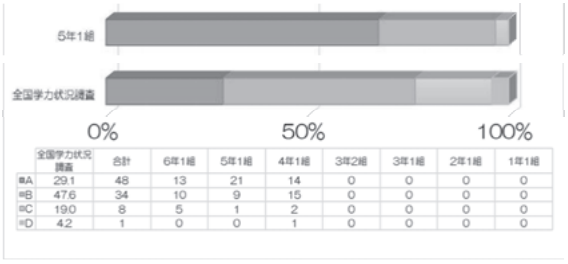
外国語科では、３年時より奈良公園に出向きインタビュー学習を行ってきた。その経験から、児童は「英語だけが外国語ではない。」や「英語だけではすべての人には伝わらない。」ということは肌で感じていた。

そこで、英語だけではなく、総合「なら」科で学んだことを、伝えたい国の人の言葉で伝えたいという意欲が児童から自然と現れ、グーグル翻訳を活用しながら多言語を学び、町に出て、自分たちの町の世界遺産の存在を紹介することとなった。

このことで、当クラスでは、自主学習の課題に、言語の特徴をテーマに調べ学習を進める児童もいた。このように主体的に興味関心をもって学ぶことは、同心円状に自分の世界を広げ、より意欲を持って自分自身の世界を広げようと他者と関わろうとする即ちグローバルに世界を広げようとする態度が育まれてきているとアンケートから伺うことが出来た。

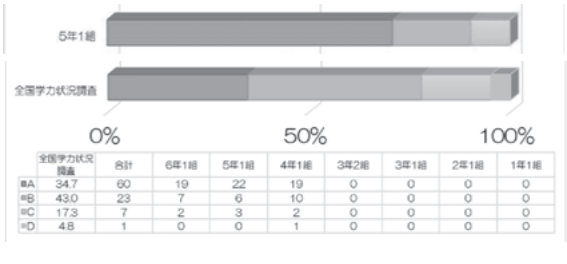


授業では、課題解決に向けて、自分で考え、
自分から進んで取り組んでいたと思いますか



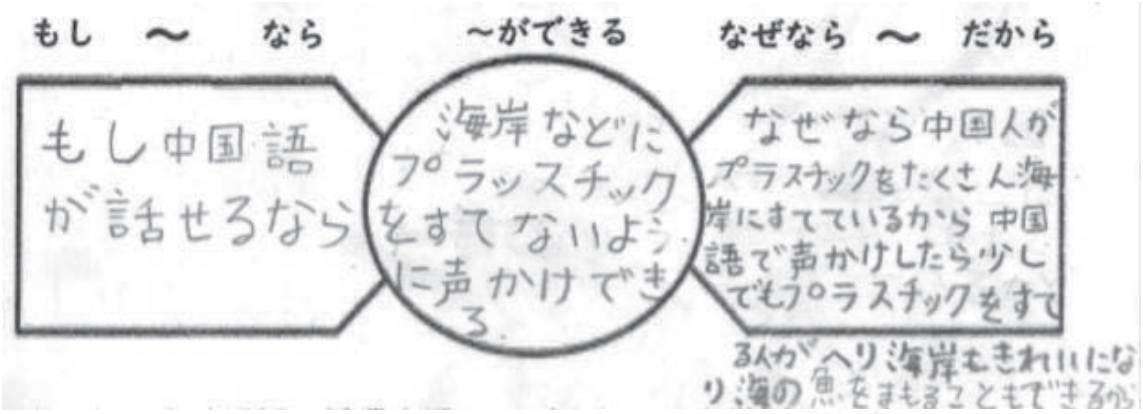
全国学力状況調査	8計	6年1組	5年1組	4年1組	3年2組	3年1組	2年1組	1年1組
A	29.1	48	13	21	14	0	0	0	0
B	47.6	34	10	9	15	0	0	0	0
C	19.0	8	5	1	2	0	0	0	0
D	4.2	1	0	0	1	0	0	0	0

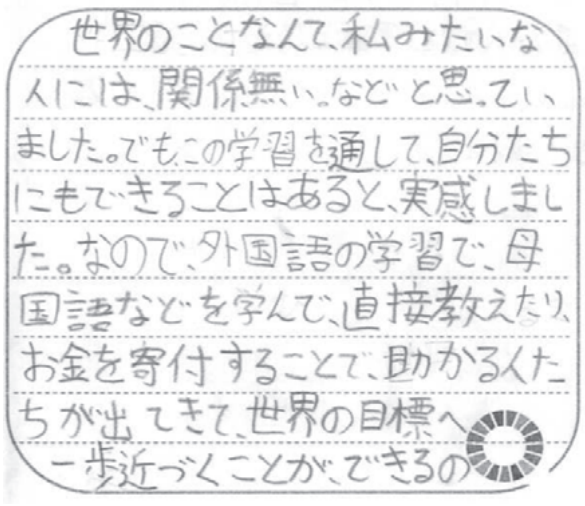
学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか



全国学力状況調査	8計	6年1組	5年1組	4年1組	3年2組	3年1組	2年1組	1年1組
A	34.7	60	19	22	19	0	0	0	0
B	43.0	23	7	6	10	0	0	0	0
C	17.3	7	2	3	2	0	0	0	0
D	4.8	1	0	0	1	0	0	0	0

またこうした取り組みは、世界市民としてのパブリックマインドの醸成としての成果もあったと感想から読み取ることが出来た。





○まとめ

最後に、こんな質問を投げかけたい。「今、あなたは目の前にあるものが、なぜそこにあるのか？何のためにあるのか？」そんなことを１日にどれくらい考えますか？

学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？それは、決して遠い世界、違った文化ばかりに目を向けることではなく、常に目の前のものに「なぜだろう？」「何なのだろう？」と“なぜなに力”を持って考えること。その先にあるものが、自分が予想も出来なかった、素敵な世界が広がっていることと、自らがまず感じ、それを自分の言葉で伝えていく、PASSION を持つことではないだろうか。

“情熱は力なり！”

「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」
話題提供者②国際バカロレアと中等教育の現場から

熊 谷 優 一

2019.12.15@奈良教育大学

本日、皆さんに伝えたい３つのこと

1）キャリア形成から見えてきたこと

・人間は唯一無二の存在であること
・知識を生成する力を持った一個人であることを受け入れること

2）教育実践から見えてきたこと

・すべての教育プログラムが目指すゴールは同じであること
・方法ではなく、目的を明らかにすること

3）グローバル人材育成を担う教員にとって必要なこと

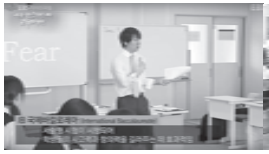
・ネットワークと人間関係を構築すること
・自分がどういう学習者であるか特定すること

INTRODUCTION：熊谷優一

大阪市立水都国際中学校高等学校国際バカロレアコーディネーター
ナレッジキャラバン主宰
文科省IB教育推進コンソーシアム　ACファシリテーター
Theory of Knowledge Principal Examiner
(Marking Standardization Meeting Member)

INTRODUCTION：熊谷優一

宮城県高校教員（英語）を退職後、大韓民国政府招聘大学院奨学生として延世大学にて修士課程を修了。帰国後、筑波大学附属坂戸高等学校にてIBコーディネーター。国際バカロレア・ディプロマプログラム校として認定を受ける。『Programme Standards & Practices』改訂プロジェクト（2017）、韓国におけるIB導入の際の文書の韓国語翻訳などIBのプロジェクトに多数参加。



本日、皆さんに伝えたい３つのこと

1）キャリア形成から見えてきたこと

・人間は唯一無二の存在であること
・知識を生成する力を持った一個人であることを受け入れること

2）教育実践から見えてきたこと

・すべての教育プログラムが目指すゴールは同じであること
・方法ではなく、目的を明らかにすること

3）グローバル人材育成を担う教員にとって必要なこと

・ネットワークと人間関係を構築すること
・自分がどういう学習者であるか特定すること

私達はそれぞれ唯一の存在である

- **教育者として皆さんにしかできないことありませんか？**

“Each human being is unique, unprecedented, unrepeatable”(Rune Dubos). Assuming this statement to be correct, what challenges does it create for knowledge production?

「人間は誰しも唯一無二で、前例がなく、そして二度と起こり得ない存在である」（ルネ・デュボス）。この主張が正しいとすると

知識の生成においてどのような課題が生じるか。

2019年11月試験セッション『知の理論』所定課題

世界を変える影響力を持った一個人

自分が何ともないと思っていた些細なことが、誰かにとっては価値のある情報である可能性がある。

何かほんの些細なことであっても、自分達の働きかけによって世の中を1ミリでも変える経験をすることができたら、子どもたちはきっと、自分たちは世界を変える影響力を持った一個人であると自覚して実社会に入っていくのではないでしょうか。それを知って学ぶのと、知らないまま学んで、社会に入ることは全然意味が違うと思いませんか？

知識の生成者としての意識

- 自分は知識を獲得する側の人間だと多くの学習が勘違いしている。また、自分は知識を伝達する側の人間だと多くの先生たちが勘違いしている。

体育館に入るときは体育館シューズに履き替えるという習慣が持続可能な社会の発展にどれだけ寄与してきただろうか。もはや無意識のレベルに落とし込まれているが、学校教育に位置づけられている清掃の時間は、東日本大震災の避難所生活の衛生的環境づくりにどれだけ寄与しただろうか。よりよい社会生活を送る上で、日本にも、日本の教育にも、そして私達個々人もグローバル社会に貢献できる知識を生成しうる存在であると思いませんか？

本日、皆さんに伝えたい３つのこと

1）キャリア形成から見えてきたこと

・人間は唯一無二の存在であること
・知識を生成する力を持った一個人であることを受け入れること

2）教育実践から見えてきたこと

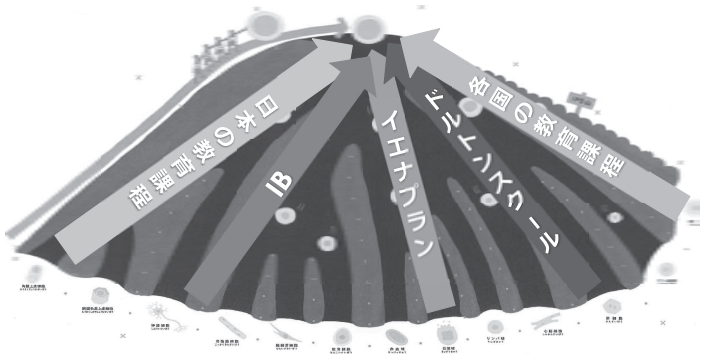
・すべての教育プログラムが目指すゴールは同じであること
・方法ではなく、目的を明らかにすること

3）グローバル人材育成を担う教員にとって必要なこと

・ネットワークと人間関係を構築すること
・自分がどういう学習者であるか特定すること

最近の教育業界の動向

海外の教育プログラムが一条校で導入され始めています



知の理論 所定課題 課題文見本

「地図は、事物を単純化してこそ有用なものとなる」。
この考え方は、知識に対してどの程度あてはまりますか。

「知識をもつことにより、特権が与えられる」。
この主張はどの程度正確ですか。

この問いに生徒が答えるためには
どのような知識やスキルを育てる必要があるでしょうか？

ダボス会議で提唱された2020年のビジネススキル

1. 複雑な問題解決力（Complex Problem Solving）
2. 批判的思考力（Critical Thinking）
3. 創造力（Creativity）
4. マネジメント力（People Management）
5. コーディネーション（Coordinating with Others）
6. 感情知性（Emotional Intelligence）
7. 決断力（Judgement and Decision Making）
8. 奉仕の精神（Service Orientation）
9. 交渉力（Negotiation）
10. 認識の柔軟性（Cognitive Flexibility）

本日、皆さんに伝えたい３つのこと

1）キャリア形成から見えてきたこと

・人間は唯一無二の存在であること
・知識を生成する力を持った一個人であることを受け入れること

2）教育実践から見えてきたこと

・すべての教育プログラムが目指すゴールは同じであること
・方法ではなく、目的を明らかにすること

3）グローバル人材育成を担う教員にとって必要なこと

・ネットワークと人間関係を構築すること
・自分がどういう学習者であるか特定すること

プレッシャーはチャンスの引き換え券

- 必要を感じていながら、劣等感に苛まれたり、気後れしたりして行動に移す決断を先送りにするのは本当にもったいないことである。

「自信がある」人ってホントにいるんでしょうか？自信があるように見せているか、自信がある・ないを考えている余裕なくパフォーマンスしなければいけないか、どちらかの人が多いのではないでしょうか。

限界に挑戦することなく限界を知ることはできない

- 挑戦する者に世界はとても優しい。

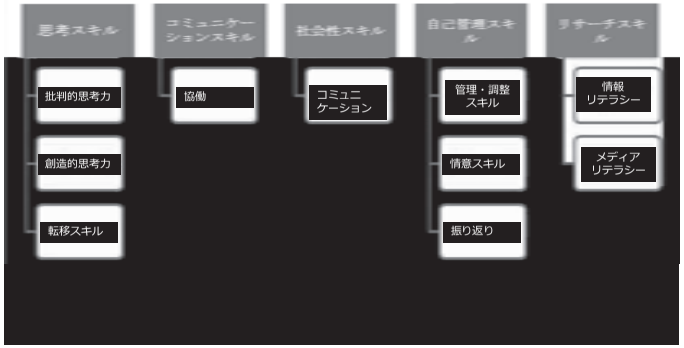
まずプレッシャーを受け入れて挑戦をする。それによって限界は見えてきます。そしてそれを知ったからこそ、知ったうえで私達は戦略を立てることができるようになるのではないでしょうか？挑戦する姿を見た人、知った人が新たなチャンスを運んできます。ここでいうチャンスは機会という意味だけではありません。うまくいかないときに、寄り添ったり、必要とする情報をさりげなくシェアしてくれたり、サポートしてくれる人的ネットワークこそが本当の意味でのチャンスではないでしょうか。

成長戦略を立てよ
～自己否定感満載な人のために～

STOP	START	CONTINUE

学習者として自分自身を特定する

IB'S APPROACH TO LEARNING



IB'S APPROACH TO LEARNING

①思考スキル
- 1 批判的思考力……問題やアイディアを分析し、評価する
- 2 創造的思考力……新しい発想と観点を作り上げる
- 3 トランスファースキル……多数のコンテクストにスキルや知識を利用する

②コミュニケーションスキル
- 1 対話スキル……議論や対話を通して効果的に情報を理解・伝達する
- 2 言語スキル……読み、書き、言語を利用した情報の収集とコミュニケーション

③社会性スキル
- 1 コラボレーションスキル……他者と効果的に協働作業をすすめる

④自己管理スキル
- 1 整理スキル……時間とタスクの効果的なマネージメント

⑤リサーチスキル……情報をみつける、理解する、裁く、作る

生涯学習者のロールモデル

生身の人間同士の感情のやり取りの中にこそ真の学びがある。

勉強する上で、どういったところで苦労したとか、それをどのように克服したとか、学習者の先輩として先生から聞く話は学習者として何よりの励みです。テクノロジーが発展し、AIから学ぶことになっても、感情を交わすことは出来ません。効率よく、成果を出せるような学習も大切ですが、感情的に共感もできる生身の先生は学習者のその時々の気持ちをダイレクトに理解できます。だからいてほしい。学校にいてほしい。先生の役割が変わっても、子どもたちの感情に寄り添う存在が学校から必要でなくなる日は決して来ないと思うんです。

奈良教育大学シンポジウム

外国人児童生徒等教育の現場から

令和元年１２月１５日（日）
四日市市教育委員会
指導主事　重内　庸司

本日の内容

①四日市市の
外国人児童生徒教育について

②グローバル人材育成を担う教員にとって
必要な力について

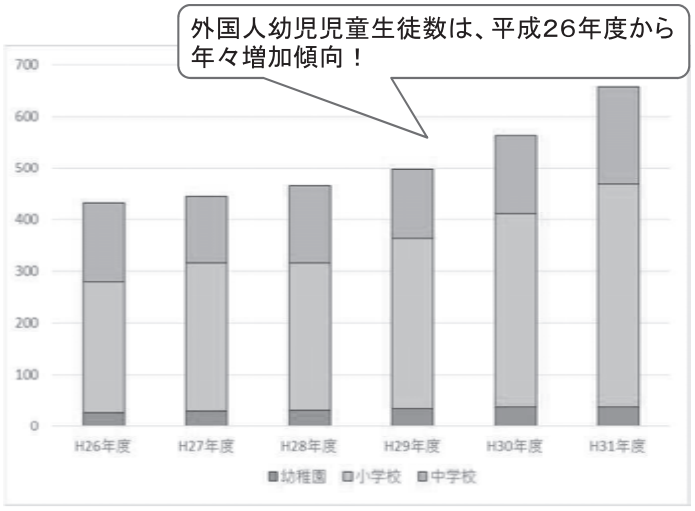
平成３０年度　都道府県別
在留外国人数と総人口に占める割合

都道府県	在留外国人数	総人口に占める割合
1位　東京都	567，789人	4．14%
2位　愛知県	260，952人	3．47%
3位　群馬県	58，220人	2．97%
4位　三重県	52，087人	2．89%
5位　岐阜県	55，205人	2．75%

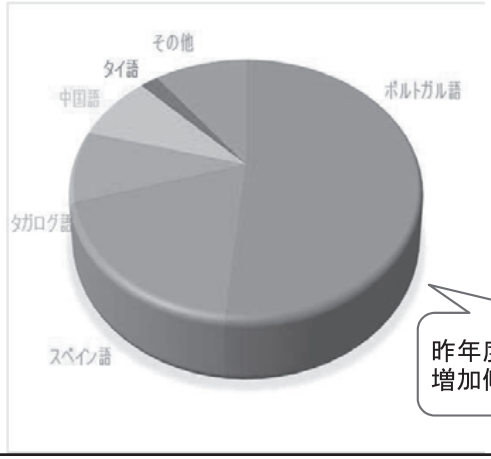
（H30末　法務省）

※三重県には、（　　）か国の方が住んでいます

四日市市の外国人児童生徒数について（R1.5）



四日市市の外国人児童生徒　母語別の割合（R1.5）



言　語	人数(人)
ポルトガル語	182
スペイン語	66
タガログ語	32
中国語	30
タイ語	7
その他	36

昨年度から(　　語)が増加傾向！

四日市市の外国人児童生徒について

笹川地区
南米系の言語（ポルトガル語・スペイン語）の子どもが集住している

近年、分散化も進んでいる！

市内中心部
アジア系の言語（タガログ語・中国語など）の子どもが多い

外国人児童生徒の受入れについて

日本語指導が必要な児童生徒が来日・転入
（市教委にて日本語の能力判定を実施）

1. 拠点校にて日本語指導

2. 居住区の学校から「いずみ」学級へ通級

3. 居住区の学校にて日本語指導

教育委員会が児童生徒の日本語能力等を踏まえ、保護者や学校と相談の上、決定する

拠点校での指導について

○拠点校
西笹川中学校・笹川小学校
中部中学校・中央小学校

- 日本語指導教員や適応指導員等を重点的に配置
- 各学校に、日本語指導教室を設置

- 児童生徒の日本語能力に合わせた個別の指導

拠点校での指導について

拠点校（初期指導教室）
における指導の様子

初期日本語指導教室等の指導について

○初期日本語指導教室「いずみ」

- 日本語指導教員等を配置
- 児童生徒の日本語能力に合わせた個別の指導計画や「いずみ学級指導のシラバス」に沿って、約３～４か月の通級指導

- 一般校（拠点校以外の学校）にも「移動いずみ」として、いずみ指導員を派遣し、指導法等を広める

外国人児童生徒教育（JSLカリキュラム）について

JSLカリキュラムを活用した
「すべての子どもにわかりやすい授業づくり」
西笹川中学校・笹川小学校

【指導・助言者】
東京学芸大学　齋藤ひろみ　教授
京都市教育委員会　大菅佐妃子　副主任指導主事

公開授業研究会や担当者研修会で市内に還元

JSLカリキュラムとは？

JSL：Japanese as a Second Languege（第２言語としての日本語）

「内容（教科等）」と「日本語」の統合教育

○「内容」と「ことば」を学ぶ
○教科等の学習の文脈から、ことばを切り離さずに学ぶ

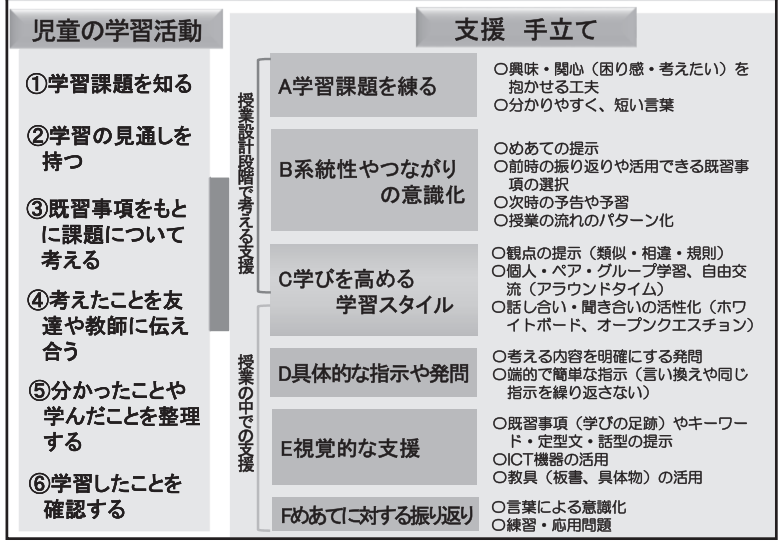
「子どもたちの多様性」に即して

○生育歴、学習歴、日本語力、認知的な発達、
家庭環境、母語、母文化、習慣・・・等々

「授業づくりのツール」の提供

○AU（Activity Unit：活動の単位）という考え方
○授業の構造（展開）
○日本語支援の方法　　等

JSLカリキュラム実践校の取組例（笹川小学校より）



事例１　A児（小２）フィリピンより来日

フィリピンからの初来日。初期日本語指導教室に通級中、保護者の都合により３週間程度で居住区の学校に戻ることになった。

１か月後、学校から「A児が教室を飛び出してパニックになる。」と電話があった。

A児には、何らかの問題があるのでしょうか？

事例２　B児（小４）中国より来日

中国から初来日。初期日本語指導教室にて４か月間、日本語指導を受ける。

居住区の学校に戻って３週間後、学校より「まったく笑顔がなく、まわりの友達と関わろうとしない。心配である。」と、学校より連絡が入る。

初期日本語指導教室では笑顔いっぱいで学んでいたB児に何があったのでしょうか？

小学校学習指導要領解説　総則編より（一部抜粋）

第３章（２）
海外から帰国した児童や外国人の児童の指導

通常の学級における指導、通級による日本語指導のいずれの場合においても、言葉の問題とともに生活習慣の違いなどによる児童の不適応の問題が生じる場合もあるので、教師自身が当該児童の言語的・文化的背景に関心をもち、理解しようとする姿勢を保ち、温かい対応を図るとともに、当該児童を取り巻く人間関係を好ましいものにするよう学級経営等において配慮する必要がある。

四日市市「外国人児童生徒　受入れ･指導の手引き」より

（2）国による学校生活の違い

子どもの出身国によって、さまざまな学校生活の違いがあります。子どもや保護者から出身国の学校の様子について聞き取りをしておくことが大切です。

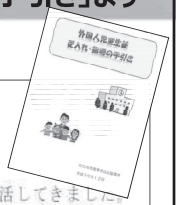
外国人の子どもは、学校生活の違いから「なぜ、どうして」と考えます。このような疑問を持ったときこそ、日本の学校生活について慣れるよい機会となります。

☆日本の学校との違い（例）☆

- 学校が３部制で、在校時間が日本より少ない。
- 給食がない。教室で一斉に食べない。自由に軽食をとることできる。
- 掃除の習慣がない。
- 校内土足である。上靴・体育館シューズに履き替える習慣がない。
- 修学旅行等の行事がない。運動会等で休日に学校に登校することがない。
- 芸術教科（図工・音楽）や体育がない。
- 制服や靴なども同じものを持つ習慣がない。学習用具も日本ほど多くない。
- 学校のきまりが細かくない。（欠席連絡をしないなど）
- 保健関係の行事がない。　など

当たり前の枠組みにとらわれず、違いを分かろうと歩み寄る

四日市市「外国人児童生徒　受入れ･指導の手引き」より



2　違いに心を寄せて

（1）違いを受け入れ、違いに気づかせていくこと

外国人の子どもは日本とは異なった文化・習慣・教育制度のもとで生活してきました。ですから、日本の子どもたちと違った考え方や行動も外国人の子どもにとってはごく自然なものです。早く日本に慣れさせようとその行動を性急に指導しても、友達がいない日本にいる不安も加わって、心を閉ざしてしまうことも考えられます。

たとえ、言葉が通じなくても、温かい気持ちでコミュニケーションを図り、ゆっくりと生活習慣の違いに気づかせ少しずつ日本に慣れさせていく指導が大切です。

しかし、言葉が通じないという思いから、注意しなければならないことも見過ごすのではなく、ジェスチャーを交えてゆっくりと日本語で話せばわかりあうことができます。

環境（学級集団等）を整備するのは担任、そして、すべての教員で指導にあたる

突然ですが･･･質問です！

質問１

四日市市は、５９校の小中学校があります。その５９校のうち、外国人児童生徒が在籍しているのは、何校だと思いますか？

【答え　５０校】

どの学校・学級に外国につながる児童生徒がいてもおかしくない時代！

突然ですが･･･質問です！

質問２

①　日常生活で外国の方と接する機会がありますか？

②　外国人と話すときは、どのような工夫をしていますか？

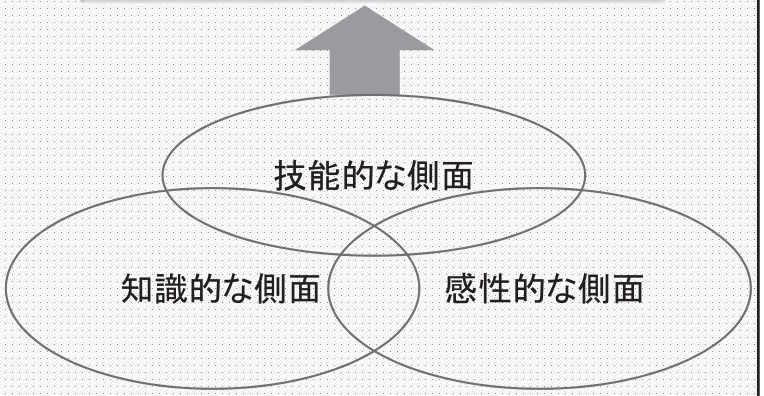
※実は、日本に住む外国の方のうち、６３％は、簡単な日本語が理解できる。

出典：言語サービスにおける英語志向（岩田2010）

これから教員をめざすなら、すべての人にわかりやすい「やさしい日本語」を意識していきましょう！

外国人児童生徒教育で大切にすること

日本語で自ら学ぶことのできる児童生徒の育成



小学校学習指導要領解説　総則編より（一部抜粋）

第３章（２）
海外から帰国した児童や外国人の児童の指導

帰国児童や外国人児童、外国人につながる児童が日本語を用いて学校生活を営むとともに、学習に取り組むことができるよう、一人一人の日本語の能力を的確に把握しつつ各教科等や日本語の指導の目標を明確に示し、きめ細やかな指導を行うことが大切である。

通常の学級の担当教師には、例えば、ゆっくりはっきり話す児童の日本語による発話を促すなどの配慮、絵や図などの視覚的支援の活用、学習目的や流れの分かるワークシートの活用などの教材の工夫、児童の日本語習得状況や学習理解度の把握に基づいた指導計画の作成など、児童の状況に応じた支援を行うこと。

JSLカリキュラム実践校の取組について（西笹川中学校より）

５つの支援（ＪＳＬカリキュラム中学校版より）

1. 理解支援
   視覚化、例示、言い換え、比喩、明示…
2. 表現支援
   表現方法、モデル、キーワード、対話…
3. 記憶支援
   視覚化、身体化、物語化、反復…
4. 自律支援
   自分で学んでいけるように
5. 情意支援
   意欲的に学んでいけるように

本市の外国人児童生徒教育の実践（課題）より

日本語指導が必要な児童生徒に「わかる授業」とは？

全体でのわかる子や指導者による説明

ペアやグループでの問題解決

いつでも誰にでも訊ける形態

自分につまずき（訊きたいこと）に合わせて訊くことができ、また、自分の理解に合わせた説明がなされる時間を授業の中でできるだけ確保することが大切！

まとめ

大切なことは・・・

「すべての児童生徒に力をつける」
という確固たる意識

「授業を行ったか」　ではなく　**「力がついたか」**

本気で力をつけようと思えば、次のようなことを知る必要がある！

在留期間は？　**日本語能力は？**　**家庭環境は？**

本人や保護者の願いは？　**母国と日本の違いは？**

「わかる・できる」という想いが自己肯定感につながる

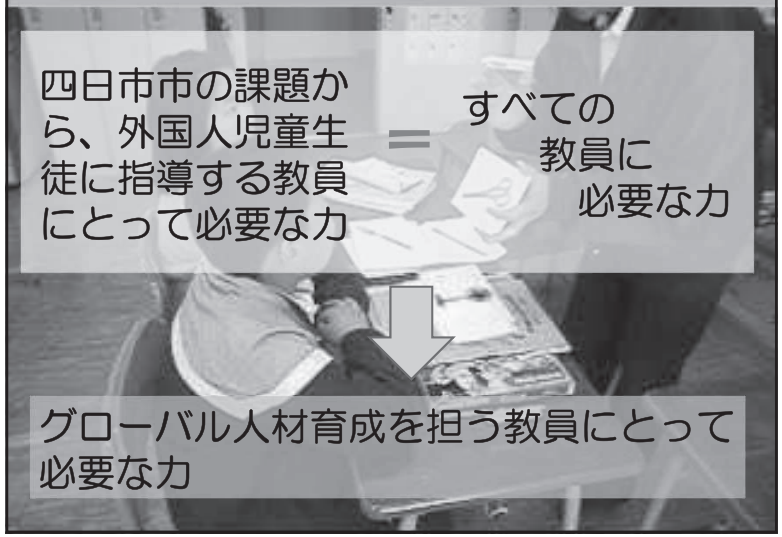
まとめ

第３章（２）海外から帰国した児童や外国人の児童の指導

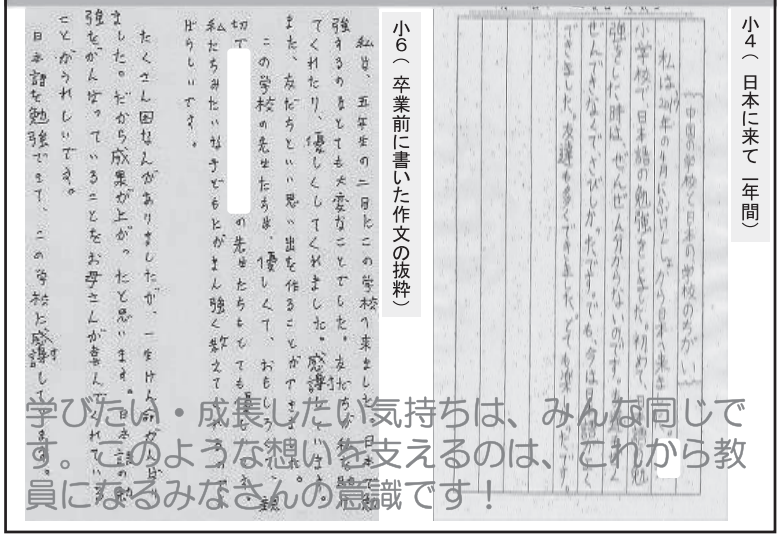
児童の受入れに当たっては、一人一人の実態を的確に把握し当該児童が自信や誇りをもって学校生活において自己実現を図ることができるように配慮することが大切である。

帰国児童や外国人児童、外国につながる児童は、他の児童が経験していない異文化での貴重な生活経験をもっている。外国での生活や異文化に触れた経験や、これらを通じて身に付けた見方や考え方、感情や情緒、外国語の能力などの特性を本人に対するきめ細やかな指導とともに、他の児童についても、帰国児童や外国人児童、外国につながる児童と共に学ぶことを通じて、互いに長所や特徴を認め、広い視野をもって異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢を育てるよう配慮することが大切である。

まとめ



さいごに



学びたい・成長したい気持ちは、みんな同じです。この子のような想いを支えるのは、これから教員になるみなさんの意識です！

教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える

学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か?：言語教育の視点から

2019年12月15日（日）　　奈良教育大学教職大学院　吉村雅仁

1

本日の話の内容

1．「グローバル人材」とは？
2．新しい言語教育観
2.1.　複言語能力
2.2.　言語意識教育（教材体験含む）
3．新しい言語教育観から考える「グローバル人材」
4．「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力
5．おわりに

2

1．「グローバル人材」とは？

「国際化」
・臨時教育審議会（1986）「教育改革に関する第4次答申（最終答申）」
・中央教育審議会（1996）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」

「グローバル化」
・中央教育審議会（2003）「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について（答申）

「グローバル人材」
・経済産業省（2010）「～産学官でグローバル人材の育成を～」
・グローバル人材育成推進会議（2012）「グローバル人材育成戦略」
・自由民主党教育再生実行本部（2013）「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」
・文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語改革実施計画」

経済界・産業界のニーズを反映

3

1．「グローバル人材」とは？

「これからの新しい国際化は、これまでの近代化時代における国際化とは異なり、全人類的かつ地球的視点に立って、人類の平和と繁栄のために様々な分野において積極的に貢献し、国際社会の一員としての責任を果たしていくものでなければならない。」（臨教審 1986）

(a) 広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
(b) 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
(c) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。（中教審 1996）

グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。(経産省 2003)

「日本人としてのアイデンティティや日本の歴史･文化に対する深い教養」を前提として、
1．英語教育の抜本的改革
2．イノベーションを生む理数教育の刷新
3．国家戦略としてのICT教育
（自由民主党教育再生実行本部 2013）

4

1．「グローバル人材」とは？

「国際化」

・臨時教育審議会（1986）「教育改革に関する第4次答申（最終答申）」

・中央教育審議会（1996）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー（グローバル人材育成推進会議 2012）

「グローバル人材」

・経済産業省（2010）「～産学官でグローバル人

・グローバル人材育成推進会議（2012）「グロー

・自由民主党教育再生実行本部（2013）「成長戦

・文部科学省（2013）「グローバル化に対応した

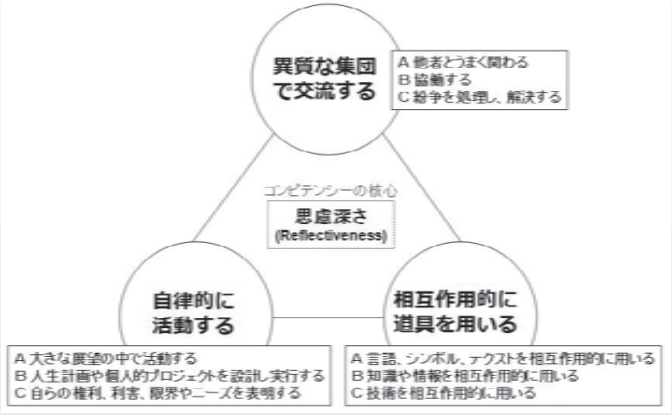
「共生」というより「競争」の論理が強くなってはいないか？

「社会的有用性を高めていくことが、経済界からの要請に応え、『国際競争を勝ち抜く人材』や『労働者として生き抜く力』を育てることに矮小化」（石井 2016）

5

1．「グローバル人材」とは？

OECD キー・コンピテンシー



参考画像：国立教育政策研究所
https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk1.html

6

1．「グローバル人材」とは？

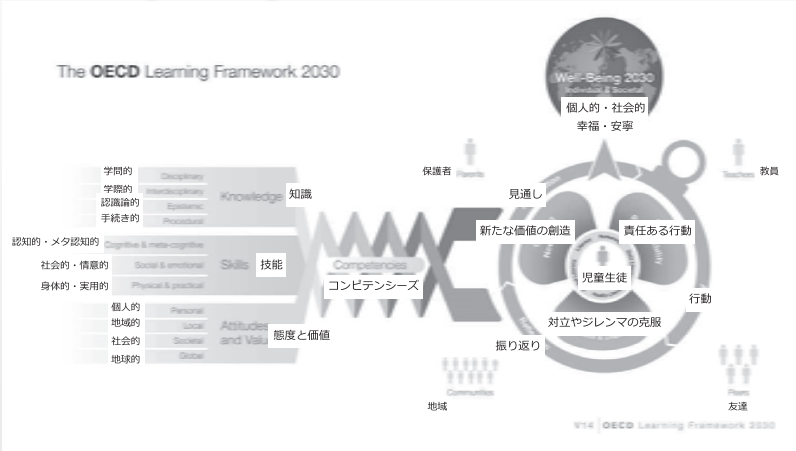
OECD (2018a)

包摂的・持続可能な世界のためのグローバル能力

7

1．「グローバル人材」とは？

OECD (2018b)



8

1．「グローバル人材」とは？

3組の先生方に質問です。

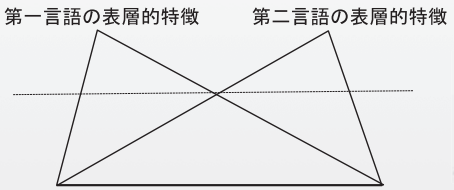
「教員として現在のような教育実践をされるようになったきっかけ・体験は？」

9

2．新しい言語教育観

2.1.　複言語能力

複数の言語能力が並列して存在するものではなく，言語変種によって程度の異なる部分的能力（一個人が例えば日本語で4技能，英語で聴解力のみ，中国語で読解力のみを持つこと）が複層的に統合された一つの言語能力



さらに、複数の言語能力には共通の基底言語能力があるとも言われている。

2言語基底共有説　Cummins（1981,P.24をもとに作成）

Cummins, J. (1981) *Bilingualism and minority language children*. Ontario; Ontario Institute for Studies in Education.

10

2．新しい言語教育観

2.2.　言語意識教育

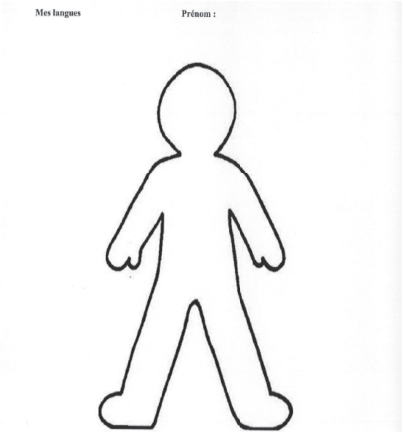
元々は英国発祥の概念である「言語意識」＝「言語の特質及び人間生活におけるその役割に対する感受性と意識的な気づき(Donmall 1985(筆者訳))」が、複言語主義と結びついて研究・実践されてきた教育学的アプローチ

10の目的（Baker, C. & Jones, S.P. (1991)（筆者訳））
1. 第一言語や複数の言語についての暗黙の知識を顕在化する。
2. 言語学習の技術を高める。
3. 言語の構造，特質及び機能に関する認知力・理解力を高める。
4. 第一言語，第二言語，外国語によるコミュニケーションの効果を高める。
5. 言語学習過程に洞察力を与え、第一、第二言語、そして外国語の学習を支える。
6. 児童生徒の学級、学校、地域、地方、国家、そして世界の言語変種の豊かさについての理解を深める。これには、世界全体における例えばスペイン語、中国語、フランス語、ドイツ語の話し言葉・書き言葉の変種についての議論も含まれ、それにより（例えば第二・第三言語としての英語話者などの）言語変種話者の劣等感が緩和されることになる。
7. 児童生徒自身が持つ言語の起源や特徴また世界における位置づけに関する気付きを高め、民族集団間のより良い関係を促進する。
8. 児童生徒の、家庭、学校教育、教科書や雇用における言語間の混乱の克服を支援する。
9. 人間が生活する上で重要な一部となる言語の価値を理解させる。
10. 世界における複数言語（bilingualism）・複数文化併用（biculturalism）についての理解を深める。

メタ言語能力と言語の多様性に対する感受性と寛容性

11

教材例：複言語能力を意識



自分の中にどのようなことばがあるのかな？

- 方言でも言語でも
- 少しだけでも
- 聞いてわかる
- 話せる
- 読んでわかる
- 書ける
- 昔はわかった

それぞれのことばが、体のどの部分につながるか、どんな色か考えよう

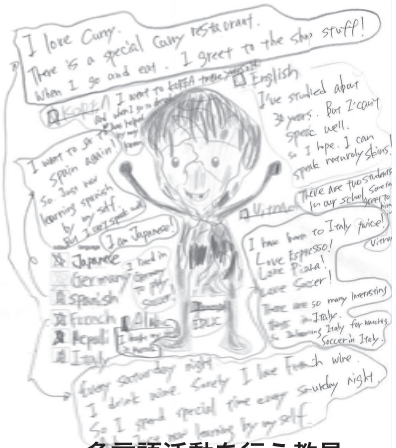
12

教材例：複言語能力を意識

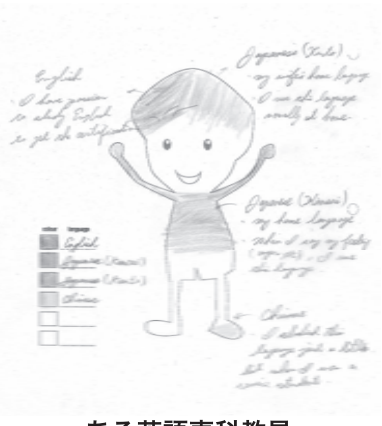
・複数の言語能力が並列して存在するのではなく，言語によって程度の異なる部分的な能力が重層的に統合されたものであることを意識する

「学習者として自分自身を特定する」

3. 新しい言語教育観から考える「グローバル人材」

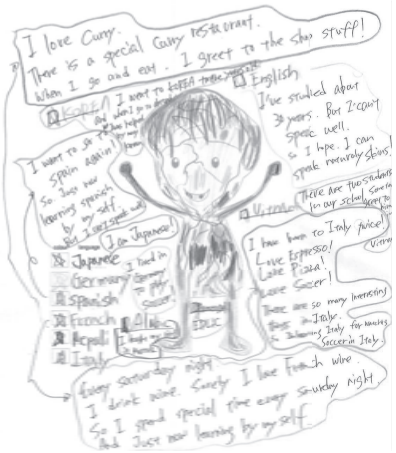


多言語活動を行う教員



ある英語専科教員

3. 新しい言語教育観から考える「グローバル人材」



自己および他者の言語的・文化的レパートリーを意識、尊重し、絶え間なくレパートリーを増やしながら、相互理解・共生をめざそうとする「開かれた態度・価値」を持つ人（仮）

4. 「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

National Framework of Languages (Scotland)

- CfE（スコットランドの学習指導要領）（Education Scotland 2018) 及びGTCS Professional Standard（スコットランド総合教職評議会 専門職基準）(GTCS 2012)に準拠
- スコットランド教育系大学学長評議会（Scottish Council of Deans of Education、以下SCDE）言語班（Language Group）が開発（SCDE 2018）

吉村・ハンコック（2019）

4. 「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

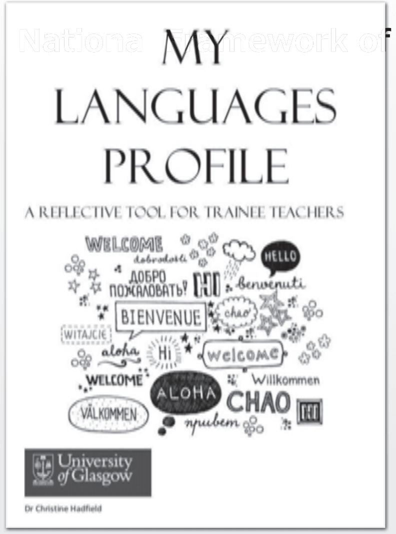
表1：言語のための国家的枠組み：複言語主義と複言語識字能力

吉村・ハンコック（2019）

17

4. 「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

National Framework of Languages (Scotland)



18

4. 「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

教師としての専門的能力の振り返り

RESULTS OF SELF ASSESSMENT IN *MY LANGUAGES PROFILE*			Tetsushi	Yosuke
A. Adapting to the context				
	A. Responding positively to linguistic and cultural diversity:			
		i. I can respond positively to linguistic and cultural diversity and treat the fact that some children are plurilingual and have experience of different cultures as a real resource for the group.	4	3
		ii. I can encourage learners to relate the target language to other languages they speak or have learned.	4	3
		iii. I can take account of the emotional dimension in linguistic exchanges with and between the children.	4	3
		iv. I can understand the personal, intellectual and cultural value of learning other languages.	4	3
	B. Organising activities on the theme of language and diversity:			
		i. I can guide the children in their encounters with different linguistic or cultural behaviour and encourage them to talk about the subject.	4	2
		ii. I can draw maximum benefit from the moments when the children start to become aware of the workings of the language.	4	1
		iii. I can relate the language I am teaching to the culture of those who speak it.	4	3
		iv. I can take into account the cognitive needs of learners (communication, problem solving etc.)	4	4
	C. Supporting the linguistic development of children with other first languages:			
		i. I can take account of the specific situation of children with other first languages in order to identify their individual abilities and needs.	4	3
		ii. I can help children to draw on their first language in order to make progress in acquiring the language used for exchanges within the group.	4	1
	D. Working as a team:			
		i. I can contribute to an effective exchange of practices and ideas between team members.	4	2
	I can also…			
B. Planning the learning experience				
	E. Theoretical and curricular context:			
		i. I can understand the requirements set in national and local curricula (Es and Os, benchmarks etc.)	2	3
		ii. I can understand and integrate the content of European documents (eg. CEFR, ELP) as appropriate in my teaching.	2	1
	F. Culture:			
		i. I can evaluate and select a variety of texts, source materials and activities which awaken learners' interest in and help them to develop their knowledge and understanding of their own and the other language cultures (cultural facts, events, attitudes and identity etc.)	4	2
		ii. I can evaluate and select a variety of texts, source material and activities which help learners to reflect on the concept of 'otherness' and understand different value systems.	4	1
		iii. I can evaluate and select activities which enhance the learners' intercultural awareness.	4	1
		iv. I can plan activities to ensure the interdependence of language and culture.	4	1
	G. Lesson content:			
		i. I can identify curriculum requirements and set learning aims and objectives suited to my learners' needs and interests.	4	4
		ii. I can set objectives which encourage learners to reflect on their learning.	4	3
		iii. I can structure lesson plans and/or plan for periods of teaching in a coherent and varied sequence of content.	4	3
		iv. I can plan activities to ensure the interdependence of listening, speaking, reading and writing.	4	4
		v. I can plan to teach elements of other subjects using the target language (cross- curricular teaching, CLIL etc.)	4	2
	H. Resources:			
		i. I can identify and evaluate a range of coursebook/materials appropriate for the age, interests and language level of the learners.	4	3
		ii. I can design learning materials and activities appropriate for my learners.	4	4
	I can also…			
C. Creating a favourable learning environment				
	I. Talking to children in the classroom:			
		i. I can tell whether the language I am using is well adapted to the abilities and needs of the children in this age group.	4	4
		ii. I can react effectively and use a variety of strategies when the children do not seem to understand everything I am saying to them (including in the target language).	4	4
		iii. I can make each child feel involved in the discussion.	4	4

19

		vii. I can present language content (new and previously encountered items of language, topics etc.) in ways which are appropriate for individuals and specific groups of learners.	4	3
		viii. I can evaluate and select a variety of activities which help learners to learn vocabulary.	4	4
	J. Organising the lesson:			
		i. I can encourage the children to use non-verbal communication to support oral expression.	4	4
		ii. I can make use of each activity in order to foster the children's language development.	4	3
		iii. I can select from and plan a variety of organisational forms (frontal, individual, pair, group work) as appropriate.	4	4
		iv. I can start a lesson in an engaging way.	4	2
		v. I can be flexible when working from a lesson plan and respond to learner interests as the lesson progresses.	4	3
		vi. I can ensure smooth transitions between activities for individuals, groups and the whole class.	4	4
		vii. I can time classroom activities to reflect individual learners' attention spans.	4	3
		viii. I can finish off a lesson in a focused way.	4	2
		ix. I can stimulate children's curiosity about writing.	4	2
		x. I can help develop each child's confidence in the use of languages.	4	3
		xi. I can cater for a range of learning styles.	4	2
	K. Developing receptive skills:			
	1. Reading:	i. I can select texts appropriate to the needs, interests and language level of the learners. ii. I can provide a range of pre-reading activities to help learners to orientate themselves to the text. iii. I can encourage learners to use their knowledge of a topic and their expectation about a text when reading. iv. I can apply appropriate ways of reading a text in class (eg. aloud, silently, in groups etc.) v. I can introduce, and help students to deal with, new or unknown items of grammar in a variety of ways (teacher presentation, awareness-raising, discovery etc.)	4	3
	2. Listening:	i. I can select texts appropriate to the needs, interests and language level of the learners. ii. I can provide a range of pre-listening activities which help learners to orientate themselves to a text. iii. I can encourage learners to use their knowledge of a topic and their expectations about a text when listening. iv. I can design and select different activities in order to practise and develop different listening strategies (listening for gist, specific information etc.)	4	3
	L. Developing productive skills:			
	1. Speaking:	i. I can evaluate and select meaningful speaking activities to encourage learners of differing abilities to participate. ii. I can evaluate and select meaningful speaking activities to encourage learners to express their opinions, identity, culture etc. iii. I can evaluate and select a variety of techniques to make learners aware of, discriminate and help them to pronounce sounds in the target language.	4	3
	2. Writing:	i. I can evaluate and select meaningful activities to encourage learners to develop their creative potential. ii. I can evaluate and select texts in a variety of text types to function as good examples for the learners' writing. iii. I can help learners to gather and share information for their writing task. iv. I can introduce a grammatical item and help learners to practise it through meaningful contexts and appropriate texts.	3	2
	I can also…			
	M. Taking children's individual needs into account:			
		…ppropriate observation instruments.	3	2
		ii. I can help each child progress at his/her own pace.	4	3
		iii. I can guide and assist learners in setting their own aims and objectives in planning their own learning.	4	1
		iv. I can identify strengths and areas for improvement in a learner's performance.	4	2
	N. Assessing for learning:			
		i. I can evaluate and select valid assessment procedures (tests, portfolios, self- assessment etc.) appropriate to learning aims and objectives.	3	3
		ii. I can design and use in-class activities to monitor and assess learners' participation and performance.	4	3
		iii. I can help learners to monitor, reflect on, edit and improve their own speaking and writing.	4	2
		iv. I can use peer assessment and feedback to assist the production of spoken and written language.	3	2
		v. I can analyse learners' errors and identify the processes that may cause them.	3	3
			4	4
	O. Cooperating with others:			
		i. I can exchange information with the children's families about their progress.	4	1
		…and take them into account in my management of the group.	4	4
		iii. I can provide colleagues or secondary school teachers with useful information about the linguistic development of the children for whom I am responsible.	4	3
	P. Evaluating and reflecting			
		i. I can evaluate and select a variety of activities which help learners to reflect on their existing knowledge and competences.	4	2
		ii. I can critically assess my teaching on the basis of experience, learner feedback and learning outcomes and adapt it accordingly.	3	2
		iii. I can use the process and results of assessment to inform my teaching and plan learning for individuals and groups (ie. formative assessment).	4	1
	I can also…			

20

4.「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

資質：

・自己および他者の言語的・文化的レパートリーを意識、尊重し、絶え間なくレパートリーを増やしながら、相互理解・共生をめざそうとする「開かれた態度・価値」

能力：

・（特に言語・文化的）多様性を教育活動に取り込む能力

・児童生徒個々のニーズを考慮し、教育活動に取り入れる能力

・他者（保護者、同僚、専門家など）と協力する能力

4.「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

教員育成指標…多様性への理解や対応を具体的に扱っているのは、愛知、横浜市

4.「グローバル人材」育成につながる教員の資質能力

5．おわりに

教員志望のみなさんへ

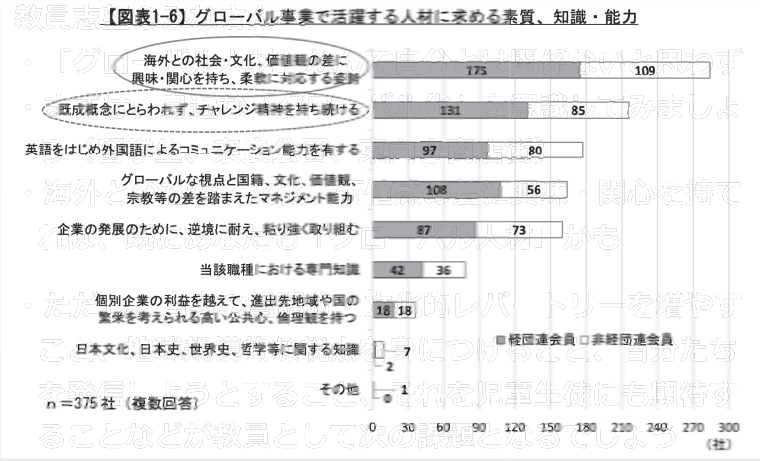
・「グローバル人材」なんて自分とは関係ないと思わず

・まずは、身近な「グローバル化」を意識してみましょう（留学生、奈良公園、東向き商店街）

・海外との社会・文化、価値感の差に興味・関心を持てれば、既にあなたも「グローバル人材」かも

・ただし、自身の言語的・文化的レパートリーを増やすこと、地球規模的な視点を身につけること、自分たちを発信しようとすること、それを児童生徒にも期待することなどが教員として次の課題となるでしょう

5．おわりに



経団連（2015）

ありがとうございました！

Masa: yshmr@nara-edu.ac.jp

Tapadh leat
Asante
Merci
شكرًا
謝謝
고맙습니다
Xin Cảm ơn
Gracias
Danke
Obrigado

Bibliography

Baker, C. & Jones, S.P. (1991). *Encyclopedia of Bilingualism and Bilingual Education.* Clevedon: Multilingual Matters.

中央教育審議会（1996）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm, Retrieved: 13/12/2019）

中央教育審議会 (2016).「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」.

Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment.* Cambridge: Cambridge University Press.

Cummins, J. (1981). *Bilingualism and minority language children.* Ontario; Ontario Institute for Studies in Education.

Donmall, B. G. (1985). *Language Awareness.* London: Center for Information on Language Teaching and Research.

グローバル人材育成推進会議（2012）「グローバル人材区政戦略」（https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf, Retrieved: 13/12/2019）

石井英真（2016）「資質・能力ベースのカリキュラムの危険性と可能性」『カリキュラム研究』25, pp.83-88.

自由民主党教育再生実行本部（2013）「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」（https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/pdf112_1.pdf, Retrieved:13/12/2019）

経済産業省（2010）「～産学官でグローバル人材の育成を～」（http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8422823/www.meti.go.jp/press/20100423007/20100423007-3.pdf, Retrieved: 13/12/2019）

松尾知明（2017）「21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革」『国立教育政策研究所紀要』第146集, pp.9-22.

文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語改革実施計画」（https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf, Retrieved: 13/12/2019）

文部科学省(MEXT)(2017a)『新学習指導要領』（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm, Retrieved: 01/06/2018）

文部科学省(MEXT)(2017b)「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」の結果について（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm, Retrieved: 30/06/2019）

日本経済団体連合会（2015）「グローバル人材の育成・活用 に向けて求められる取り組み に関するアンケート結果」

OECD (2018a). *Global Competency for an Inclusive world*. (https://www.oecd.org/education/Global-competency-for-an-inclusive-world.pdf, Retrieved: 14/12/2019)

OECD (2018b). *The Future of Education and Skills: Education 2030*. (http://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf, (Retrieved: 14/12/2019)

臨時教育審議会（1986）「教育改革に関する第4次答申（最終答申）」（https://www.niye.go.jp/youth/book/files/items/1538/File/yojitooshin.pdf, Retrieved: 13/12/2019）

吉村雅仁, アンドレア・ヤング (Yoshimura, M. & Young, A.) (2016)「小学校外国語に関わる教員研修への複言語主義の導入―その意義と研修モデルの構築―」『奈良教育大学次世代教員養成センター紀要』No.2, pp.87-96.

吉村雅仁・アンディ・ハンコック (Yoshimura, M. & Hancock, A.)（2019）「スコットランドにおける言語教育と教員に求められる資質能力-教員としての専門職基準と言語のための枠組みを中心に-」『奈良教育大学次世代教員養成センター紀要』No.5, pp.141-150.

国際交流留学センター主催　2019年度シンポジウム
「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」

「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？」

趣旨

2014年度～
学長裁量経費プロジェクト「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究

出発点
教員養成大学にいる私たちにとっての**「グローバル人材」「グローバル人材の育成」**って何？

［2019年度プロジェクトメンバー　※50音順・敬称略］
和泉元千春（国際交流留学センター）、勝原崇（本学附属小学校）、
渋谷真樹（学校教育講座・国際交流留学センター長）、長谷川かおり（本学附属幼稚園）、
頓宮勝（国際交流留学センター）、橋崎頼子（学校教育講座）、松田孝史（本学附属中学校）、
松山豊樹（理数教育研究センター）、横山真貴子（学校教育講座）、吉村雅仁（教職大学院）

2015年度～
シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」を開催

●1年目（2015年度）
「グローバル人材」「グローバル人材の育成」
→　教員養成の文脈で捉えなおすことの必要性とその方向性を確認する

●2年目（2016年度）
→　より具体的に学校教育現場での問題に落とし込んで考える
・多文化化する教育現場に対応できる多文化教員の資質と能力とは何か？
・次期学習指導要領と関連付けてグローバル人材とその育成のあり方を考える

●3年目（2017年度）
→学校教育の場で「グローバル人材育成」を担う教員自身にも必要な態度・技能とは何か？「ことば」をキーワードに体験的に学ぶ

●4年目（2018年度）
→学校・地域でできる文化言語の多様な子どもの支援の基礎と教育実践を学ぶ

5年目（2019年度）
学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？

教師（を志すみなさん）自身にとって必要な資質・能力とは？

※これまでの事業の詳細は報告書をご覧ください。
URLhttp://cies.nara-edu.ac.jp/report.html

本日の流れ

学校現場からの示唆（3つの現場からの話題提供） 30分×3

13:45-①小学校の外国語教育の現場から
岸下哲史氏（都祁小学校教頭）・大形憲治氏（椿井小学校教諭）

14:15-②国際バカロレアと中等教育の現場から
熊谷優一氏（大阪市立水都国際中学校・高等学校　国際バカロレア・コーディネーター）

14:45-③ 外国人児童生徒等教育の現場から
重内庸司氏（四日市市教育委員会指導主事）

休憩（15分）

15:30- 講演「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？」
吉村雅仁氏（本学教職大学院教授）

質疑応答

16:30- 閉会

お帰りの際に参加者アンケートを回収Boxに入れてください。

○「**教職実践演習（国語）」受講生**は、氏名を忘れずに！
（出席確認となります）

○本シンポジウムの報告書にアンケートのコメントを掲載します。
承諾の欄に☑をお願いします。
・プライバシーにかかわる内容は掲載しません。
・本事業にかかわる成果発表（報告書等）以外の目的で使用しません。

参加者のコメント

●話題提供者への質問＆感想

①〔岸下先生・大形先生〕への質問＆感想

・外国の子どもが日本にいる状況はなかなか馴染めないものだと改めて感じました。周りの子どもたちにとっても多様性理解のきっかけになっていて全員が学べる実践だと思いました。

・身近に外国人のことについて意識する事ができる環境にいれば児童生徒にとっても学習を深められると感じました。問題はへき地などの外国人との関わりが少ない地域での教育方法をどうするかだと思いました。

・外国語活動=英語のイメージしかなかったですが様々な言語を学んでおり、驚きがありました。どうしても外国語となる母語と違い親しみ深くないと思うので導入が大切になると思いました。「情熱は力なり」

・小学校外国語の授業は週何時間あるのか、わかりませんが、イメージで、週一程度であると思っていて、英語に触れるくらいだろうと想像していましたが、英語以外も学び、外に飛び出してインタビューをするなどしていることに驚きました。子どもたちが変わっていくことは感動的で、教員のやりがいだと改めて感じました。

・小学校での実践をもとに、グローバル教育について考えるきっかけとなる話だった。

・学校教育のなかでこれだけ熱心な外国語教育を受けたことはなかったのですが、目的・目標・熱意をもって指導を行うことと、その熱意が子ども達自身からも引き出されていくことが重要なのだと感じました。

・コミュニケーションをとる上で壁と感じるのはやはり言語だと思います。しかし、言語の違いを上手く利用して、逆にそこから国際理解を広げられればとても良い活動になるんだと思いました。

・児童に外国語の授業で様々な国の言語を学ぶだけでなく、実際に外国の人と話して、本当に話してみることで、実感を持って身につけ、言語だけでなく、異文化交流することもでき、座学だけでなく、体験の大切さを学びました。

・スリランカ出身の子どものお母さまを巻き込んでの異文化学習、興味を持ちました。今は大学生になり、小学校で受けた授業が彼の成長に関与してきたことが実感できました。

・私も小学校で、多言語で国際理解授業をやることが沢山あるのですが、英語以外のことばはとても人気があるので、英語だけでない異文化を入れるという話はとても共感しました。動画でも子どもたちがイキイキしているのが印象的でした。

・小学校の授業で、多文化を理解してもらうために、一日の始まりに他国語ですることからスタートし、総合の時間を使って、インタビュー学習したり、外国人と接触したりして、学生が多文化を理解すると共に、学んでいて、グローバルな視点を持った人材を育てていることに感激した。

・奈良の街に多く訪れる外国人観光客と関わることによって多様な文化に触れることができるという実践を聞いて、身近な所にも、自分たちと異なる文化に触れる機会はたくさんあり、そのような機会を逃さないような実践を行ううえで、貴重なお話でした。ありがとうございました。
・どの実践もとても心を打たれました。奈良という観光地を利用したインタビュー学習は自分の住んでいる地域について改めて詳しく学ぶことができると共に、外国の人との関わりも持てるので素晴らしいものだと思いました。外国にとても行きたくなりました。
・素晴らしい実践をご紹介しただきありがとうございました。
・私は小学校教員を目指しています。外国語教育が子どもたちの人としての経験となり、大きな糧として子どもたちの自信を生み出していることに感じました。英語教育こそ教室でするのではなく、グローバルに教室を、日本を飛び出してするべきものだと考えさせられました。
・現場での取り組みを知ることができ、とても勉強になりました。世界遺産があり、観光客がたくさんいる奈良だからこそできる取り組みで、とても興味深かったです。私も実習に行ったとき、東大寺での外国語でのインタビュー活動を行いましたが、興味が向かない子どもも多くいて、うまくいかなかったのですが、今日のお話を聞いて、朝の会であいさつを長期的にとりくむ大切さを学びました。
・外国語活動・総合の時間で英語をただ学ぶだけではなく伝えること・異文化に触れて興味をもつという様々な人がいる世界で生きる根本を学んでいくことが大切だと分りました。
・第二言語習得の観点からも、外国語を学ぶ機会として、ちゃんと論理（input、output）に沿っていてとても興味深かった。
・“奈良”という地、独特の学習アプローチがとても興味深かったですが、奈良以外の地でできるアクティブ・ラーニング的な外国語学習についても考えたいと思いました。
・これから本格的に小学校英語の教育が始まるので、どのような活動をしているのか知れてよかったです。動画の子どもたちが本当に一生懸命自分が勉強した言語で話していてすごいと思い感動しました。でも奈良市だからこそできることで、その他の市町村では別の方法を考えなければと思いました。
・言葉が全く伝わらないというのは、児童・生徒たちにも、相手にとっても不安だと思うので、インタビューの相手の国の言葉であいさつをするということは、距離が縮まり、素敵だと思いました。私は実際に外国の方と話すような授業はあまり受けたことがありませんが、子供たちにとって、実際に話して伝わる経験が大切であることがよく分かりました。
・グローバル人材育成のための外国語学習で、教員が様々な機会を設けることは大切だと思いました。生徒（児童）の主体性を大切にして、学習意欲を高めるために何が工夫できるのだろうと疑問を感じました。
・大学生になってアルバイトをする中で、多くの外国人と話す機会があります。しかし、

いざコミュニケーションをとろうとすると、リスニングはできてもスピーキングがわかっていてもできないことがよくあります。小学校のうちから積極的にインタビューをしていると積極的な子どもが育つと感じました。奈良は外国人観光客が多いですが、僕の出身の地方はそういった機会が少ないので、活動を考えるきっかけになりました。

・子どもたちの動画を見せていただいて非常に感心しました。自分は何も知らないなと痛感しました。
・インタビューは、私も小学校の教育実習で行ったのですが、出身地を聞いておわり、みたいな感じで終わってしまい、その後の授業でもうまく興味関心に繋げられませんでした。今日の話を聞いて、やはり校外学習前の準備学習は大切で、教師自身が広い視野を持つことが大切だと思いました。
・授業における実践したインタビュー活動はとても魅力的なものでした。地域理解の活動も含めても学びの多いものであると感じた。
・日々の授業の 10 分間という短い時間を使って児童たちの異文化に触れる興味やきっかけを生む、長期的なプランが凄い良い視点だなと思いました。自ら率先して取り組む子と、中々行動に移すことができない子がいると思いますが（社会的、文化的背景が潜んでいるかも？）、そのような児童に対する対応はどのようなものが適切でしょうか。
・観光客にインタビューを行うことで、異なる国の言語を使用してのコミュニケーションをとることができるというのは、世界遺産が身のまわりに豊富にある奈良ならではの学習内容ではないかなと考えた。私は三重出身で、三重に戻って教員になろうと考えているが、世界遺産が少なく観光客がいないところで異文化を学ばせるにはどんな取り組みができるか考えていきたい。
・「外国語活動」というと英語の学習をイメージしていましたが、それだけではなくて、もっと多くの視点を持つべきだなあと感じました。母語で話すというのがすごくいいなあと思いました。
・子どもたちがすらすらと外国語を話している映像が印象的でした。積極的にコミュニケーションすることが大切だと感じました。
・異文化の交流を言語を使用することを通して行うのはとても面白いと感じた。ハス君は「自分にスポットライトが当たってうれしかった」と言っていたが、児童１人１人にスポットライトを当てていくことが可能なのか気になった。
・好きこそものの上手なれという考えが自然と入っていくような実践だと思いました。
・生徒に対して、いつも真剣に向き合って取り組む姿勢は自分にとって理想像です。英語だけに限らない言語活動をすることに少し驚きました。（小学校で）
・動画を見て、学んだことが活かされた瞬間を見たとき、「この教育は児童にとって一生残るような体験になっただろうなと思いました。自分の夢を語れるような自信を児童に身につけさせてあげたいと強く感じました。
・グローバル教育のスタート・１つとして、違いを受け入れることというお言葉は的を射て

いると感じました。お話ありがとうございました。
・知りたい！や伝えたい！という気持ちを原動力にした学習活動の影響の大きさを感じました。子ども達自身が「興味を持って学ぶことの楽しさ」を感じられるすばらしい取り組みだと思います。
・外国語教育に限らず、子どもの興味をかきたて、自主的な学習へ繋げていくというのは学びの根本だと改めて感じた。一歩町へ出ると、目で、耳で、肌で経験できるのは奈良の良さであり強みだと思った。それをフルに活かす教育は理想的。〔他の子と違うところ→自分だけが持っているもの〕
・英語だけでなく母語について知ることは、もっと知りたい、もっと話してみたいという子どもの意欲につながると思いました。古都奈良ならではの実践だと感じましたが、観光地以外で伝える実践を知りたいと思いました。
・小学校の児童たちが学ぶ意欲をもって活動しているのが本当にすごいと思いました。どのようにやる気や興味を引き出しているのかがとても気になりました。
・実践を行った後の児童、生徒がどうなっているのかということは以前から気になっていたので、私にとってとてもいい発表でした。児童があんな積極的にインタビューを行っている実践にとても感心しました。
・国という垣根を越えて、異文化を学ぶグローバルな授業はしばしば取り沙汰されているのを目にするが、その具体的な実践例などは知らないままだったので、インタビューを実際に行うというユニークな活動を知って驚いた。
・「興味を持って学ぶことの楽しさ」「好きこそものの上手なれ」という姿勢は、学校教育全体で求められているのではないかと思いました。複数の外国の文化やあいさつについて学ぶことで、児童たちは自然と多文化的な考え方を身に付けられるようになるのではないかと思いました。教室内の活動だけでなく、実際に外国人の方と関わることで、本当に多様性を理解させることができるのだと感じました。
・外国語を上手にするためではなく、国際的な視野を培うのはグローバル人材育成には役立つと思います。単一の英語、英語圏文化を学ぶだけではなく、複数の異文化を理解する中で国際理解を学習するのは外国語学科の独特の役割だと思います。
・外国語教育を通して、異なる国の人々への理解を深めることができることを学んだ。座学だけでなく、実際にインタビューを行い、そこでの経験をモチベーションにして、次の学びに生かすことが大切だと感じた。そしてその学びへのきっかけは「興味」だと考えた。
・外国語教育をすることによって、母国語である日本語をきちんと使おうという認識や言葉だけでなく気持ちも大切になるということを学ばせることができることを知りました。このことを子どもたちに伝えるために、私自身も外国にもっと興味を持つべきだと感じました。
・立地と環境を最大限に活かしている活動、実践であった。外国人観光客や日本在住の外国

人がいないような田舎では、次はどのような実践をするのかが気になった。
・Q.「外国語科」の中では、英語の文科省教材を使った授業時間も確保されているのでしょうか。また、奈良県内の公立小学校で、同様の質の授業がされている学校はどれくらいの割合であるのでしょうか。
・子どもの心に残る貴重な体験をつくっていらして素晴らしいと思いました。
・お2人とも、若い頃に濃密な体験をされ、それが糧となって、今日紹介して下さったような実践づくりにつながっていることがよくわかりました。
・子どもたちだけでなく教師もチャレンジ精神を持って何事にも取り組む姿勢が必要だと気づかされた。
・教師の取り組み方で子どもの世界をどんどん広げることができると思いました。ハス君の「光」という表現でどれだけのことだったか伝わってきました。来年から僕も教員として努力していきます。英語だけではなく多くの言語に触れさせることは外国や世界に対する認識を変えていけるだろうと考えました。「日本語」も一つの言語だと私も再認識しました。

②〔熊谷先生〕への質問&感想

・自己肯定感を伸ばす教育は私もぜひしたいと思っていて反省させたがるというのがとても納得しました。
・問題を考えた時「地図」とは何だろう、という定義づけから入っていきました。定義づけを行うときいた時に考え方があっていたのかなと感動しました。反省する機会が多いので「ほめる」機会を大切に何事もしていきたいと思いました。
・自分が当たり前だと思っていても違う人からすると当たり前ではなく、押しつけるのは良くないと思いました。外国籍の子が増えるにつれて文化も増えるので「知る」ということが大切になってくると思いました。
・自己肯定感を育むことは子どもが将来生きていく上でとても重要なので、意識的に育ませたいと思いました。
・例や表現がとても分かりやすく、その光景が想像できた。偏差値や学力がある程度均等化されている高校とは異なり、差が存在する小中ではどのように教えていくのか疑問であった。「自信があるふり」をさえるという言葉がとても胸に残った。
・グローバル社会として、今の教育にとって何が必要か学べました。よく言われる「コミュニケーション力」以外のスキルが出てきておもしろかったです。
・先生のキャリアアップは私の理想でした。私も「知識を得たい」と思うタイプで、それは自分に自信がないからで、また、ものごとに疑問を持ったり、なにごとからも学べると思っていなかったりするからだと思いました。認識をし直すことで、学べること、発信できることがあると感じました。すべてのお話が面白く、共感しました。
・方法＜目的ではかる大切さを知れた。挑戦の応援をしてもらえた。

・知識の生成者としての自覚意識や自己肯定感の高め方・プレッシャーの生かし方といった、教員としての指導時の姿勢や視点も感じとることが出来たと思います。
・与えられて意識が強くて、自分が与えることができるということに気づいていないのだなと思いました。考え方の違いによってこれからの教育も変わっていきなと感じました。
・自分自身が気付いていないような考え方などを、他者と関わり合う中で、意識化させることの必要性を実感しました。
・生身の人間問題の感情のやり取りの中にこそ真の学びがある。生身の先生の存在が大事ということを共感する。
・知識とは何なのかについて、考えさせられる内容でした。自信を持つことの難しさを知りました。自分なりの考えを持つ大切さを学びました。
・正解のない問いかけに対する答えを持っている子どもは沢山いると思うので、それを生かした教育ということに関心を持ちました。
・IB を実践し、子供達に多文化への理解や問題解決する力や問題を色々な面から見るという教育理念がすばらしいと思った。
・これからの日本の教育は世界標準に近づく必要があります。海外へ留学する力とチャンスが必要な時代だと思います。
・キャリアとして良い道だなあと思った。私も高校教師の後、外国で大学院に行きたいので。
・自分たちも、渋谷先生の授業で IB について学んでいますが、このように IB の中身について関わっておられる熊谷先生の話を聴かせていただき、自分たちの議論していた、”定義付け”の話が間違っていなかったことが確認できました。ありがとうございました。
・バカロレアについては教育社会学特講の授業で学んでいたので、とても興味がありました。特に印象に残っているのが、「自分も知識の生成者であるという意識を持つ」ということです。この考えは今まで私にはなかったので、知識に対して受け身になりすぎないようにすべきだと感じました。
・失敗を恐れずに自らの限界を超えてご活躍している熊谷先生に感動しました。近年様々な教育プログラムが存在し、どれが良いのか悩むことがありますが、全て平和な社会に貢献するためにあるものだと考えると選択しやすいと思いました。「知識を生成する者」として児童たちに教育していきたいと思いました。
・授業でやっていた IB についてのお話を聞けて良かったです。「STOP,START,CONTINUE」という反省だけでなく良いところを見つけ、自己肯定感を上げる取り組みは、面白いと感じました。ありがとうございました。
・教員としてグローバル人材育成に携わる中で新たな視点を得て、経験をしていく時、限界に挑戦し、外に出ていく姿勢を大切にしていきたいと感じました。
・私は学校今日では子どもを人として成長させることこそが大事だと思っています。その中で IB の考え方が自分の知りたいこと、子供に伝えたいことにぴったりで、さらに知りたく学びたくなりました。ブログ絶対読ませてもらいます！自分も IB を教える立場になり

たいと本気で思えました。
・体育館シューズやそうじの時間の話は、そういう考え方もできるのだということを知って、興味深かったです。教師になる身として、まずは子どもたちの教育に自分の良さ活かせるよう、自信をつけて行きたいと思いました。
・熊谷先生のおっしゃる考え方や価値観には非常に共感します。ただ、子ども達につたえるとき、経験や挑戦する前にやめてしまう、踏み出せない子が多いと思います。そういった子ども達に一歩目の踏み出し方を教える、時に背中に無理矢理でも、押してやるのが教師の仕事だと思うこともあります。自己肯定感の話がありましたが、自分は高い方だと思います。幼い頃から「オレってすごい」が口癖でした。両親は恥ずかしがっていましたが、22 年間この考え方で良かったと今でも思っています。
・IB の学習像のワード(挑戦する人、知識のある人、振り返る人)などを意識したスピーチで、IB に関する考えを深められました。IB がよりグローバルを目指しているのは知っていましたが、その試みを邪魔しているものはあるのかについて、深めたいと思いました。
・”知識の生成者としての意識”というのは自分にはなかったので、とても勉強になりました。悩みや葛藤がみんなの力になるという意識を子どもたちにも伝えて行けたらと思います。
・「知識を生成する」考え方を持つことが大切だと思いました。また、どのような力を身に付けていくのかを教師自身も考えていくことが大切だと思いました。
・「地図の定義」の話がとても哲学的で大事なことと思いました。挑戦の失敗に恐れてしまう子どもをつくらないために、大人の責任は大きいと思いました。
・マイナスイメージが持たれてしまう「反省」の話をしていただいたが、褒めるというプラスイメージのことにも焦点を当て子どもを見ていきたいと思った。
・ペアを組むときは、自分と最も違う人とペアになることという言葉が印象的でした。違う人と出会い、学ぶことで人生の分岐点となることもあると改めて感じました。私も教師として子どもたちにとってそんな“違う人”の一人となればいいと思います。
・「何かを定義付ける力」を生徒たちに育む方法について、詳しいお話をお聞きしたかったです。自己否定感について授業でも、反省や改善点を考えることが多く、他者の良いところを見つける経験はありますが、自分の良いところを見つける取り組みは少なく、とても勉強になりました。
・無意識レベルに落としこまれている習慣が 1 つの知識であること実感しました。今は外国語教育やアクティブラーニングを意識的に取り入れているが、そのうち当たり前になるのかなと感じました。
・私の中でも知識は受容するものであるというステレオタイプがあった。(無意識のうちに発信しているかもしれないが)
・反省する習慣があり、それが自己否定感につながるという話がとても腑に落ちました。
・キャリア形成ということで、教師の学ぶ姿勢の大切さを学びました。人は一人一人異な

るものであり、行き着く先が同じでもその思考や考えの道筋は違う。そのため、その形成過程に目を向け一人一人にあった学習の仕方を考える必要があると感じました。

・自身の持つことの是非を問われたとき、はっとした。児童生徒に教師らしい一面を見せるために、教師は努めて自信のある態度をとるべきだと思っていたが、やみくもにただ自信家を演じるだけでは不十分だと感じた。

・“知識の生成者としての意識”についてのお話が目からウロコでした。限界に挑戦することで限界を知ること、他の人とつながることの大切さのお話がとても心に刺さりました。

・人間として、自分自身の生き方も問われていることに気づきました。単に言語を学ぶことではないんだと思いました。

・「自分の苦労が他の人にとって価値のあるものかもしれない」という言葉が印象に残りました。1B 以外にも様々な海外の教育プログラムが導入されていることを知って驚きました。どんな教育プログラムなのか学びながら、その中で自分にできることはあるのか、どんなことなら自分でも取り組めるのか考えていきたいです。

・シンプルに唯一無二であることが、いち教員志望であるものとして希望を感じるものでした。

・「全ての教育プログラムの目指すゴールは同じである」ということを改めて認識することができました。また、世界という舞台で日本人を見たときに、日本人はマイナス思考が強く、自身の影響力をもっとポジティブに考えることが必要だなと思いました。

・授業内で、国際バカロレアについて基礎を学んでいたので、バカロレアの設置された目的、理由などは理解しているつもりであったが、「知の理論」についてはよく理解をすることができず、今回 Principal Examiner の方から、自らがなっていくべき理想像をイメージするとともに、TOK の内容に触れることができたのでよかった。IB 認定校ではない学校でも似たような授業実践ができないか考えていきたいと思う。

・課題のはじめの中で、自分だからこそ教えることができることはなにか？という言葉に「あっ」と思わされました。その他にも自信を持つことが大切なのかとありましたが、私も自信を持つことが大切とは思わない。私は自分に自信がないからこそ、自信が持てるように努力し、挑戦します。大切なのは、挑戦する気持ちだと思います。

・学校生活でのすべての活動が、様々なことにつながっているということを感じました。

・無意識の中で知識が育成されていき、学校生活以外の場でよりよい行動をすることができると知り、学校がいかに大切であるかを考えることができました。また、チャレンジすることの大切さも知ることができました。

・知識とは?みたいな問いは抽象的ですごく難しかったです。自己肯定感を高める STOP, START,CONTINUE のふり返りはいいなあと思いました。いいところを見つけるふり返りは大切にしたいです。

・自分が行動することで世界を変えていけるという感覚は子どもはもちろん、僕たちにも

大切な感覚で、あきらめてはいけないなと考えました。最後にお話しして下さったことが、今一人でもう一度バックパッカーに出るか悩んでいたのが吹っ切れました。行こうと思います。ありがとうございます。

・振り返り方が悪いというのは目からウロコでした。海外の教育から学ぶことも大切と感じました。

・教える側、習う側に完全に分断されてしまっているような考え方は、自分にも染みついているように感じた。共に学び、ともに生み出すという視点を大切にしたい。また、自分の良いところに目が向けられるような活動も考えたい。

③〔重内先生〕への質問&感想

・日本語指導の事例について、初めて知り、関心を持った。

・奈良は外国人観光客が多いので、海外の人と触れ合う機会が以前より増えたと思います。しかし、教育現場にもそのことが影響していることは知りませんでした。

・実際的な外国人児童生徒の実態からケーススタディまで、新鮮だった。

・できるだけアウトプットさせるのは言語が身につきやすい方法だと思いました。どんどん使わせていくのは大切な気がしています。

・生徒への配慮をより意識していくことが必要な時代になっているのだと感じました。

・外国にルーツをもつ生徒への支援は、実際に難しい問題であると思った。しかし、その生徒一人一人の文化的理解はもちろんのこと、一番はその生徒が抱えている悩みや悲しさを理解することであろう。

・授業することより、力をつけることを考えなければならないということが印象的でした。

・すべての子どもに力をつけるという教員の意識、私も同感です。

・外国にルーツをもつ子どもも含め、教室にいる児童全体に力をつけるという意識を自分も持ち続けたいと思いました。

・授業でもやっているような、外国にルーツを持つ子どもたちへの指導について、「力をつける」ということが重要であることを再認識できました。お話ありがとうございました。

・外国人児童生徒の教育を考える上で、それらの子ども達を含む「すべての児童生徒に力をつける」という意識を持ち、授業や学びを子どもの立場から見つけることの大切さに気付かされました。

・「四日市市の外国人児童生徒母語別割合」のグラフの中に英語がないことに気づき、英語を話せてもグローバルに活躍するためには少し物足りないのかもと考えました。自分が教員になったときに自分のクラスに外国人児童生徒がいたとき怖気づけないようにこれから準備していこうと思えました。

・来日した子どもたちの困っている事例を見て、教師自身が、来日した子どものことを知ろうとして、どうなりたいかという気持ちによりそうことが大切だと感じました。どんな心がまえで、さまざま背景をかかえた子どもたちと関わり、授業していけばよいのかが、と

ても勉強になりました。

・外国にルーツを持つ子ども達が在籍する学校は、企業や工場の多い地域だけでなく、日本中どこでもそうなり得る時代だと感じました。言語の問題に注目してからですが、その子が生活する環境、文化の違いなどが学校生活で大きな影響を与えるということを学びました。日本におけるスタンダードはワールドスタンダードでない、ということを頭において指導していく必要があると思いました。実践していきたいです。

・事例についての話から、目に見えて教育現場が変容している今日に、日本人児童に合わせた教育も、何の意識もなく行う教員がいることに驚き、同時に危機感を得ました。また、外国人児童への支援を行いながら、教育カリキュラムをこなすために、今の教育制度（時間や内容）でいいのか疑問に思いました。

・自分の担当する学級に日本語の指導が必要な児童生徒がいたらと考えると、うまく対応できる自信がありません。正解はないけれど、子どもと信頼関係を築くことが大切だと思いました。担任の先生が多忙なのは事実です。だけれど、「あなたのこと見ているよ」と発信しなければならないと思います。学校の大人だけでなく、子ども同士のつながりや地域の支援が大切で、広い視野を持つ意識でいたいと考えました。

・「すべての児童生徒に力をつける」という意識を持つことが、ひいては児童生徒のことをより把握・理解することに直結し、指導の際に考慮すべき知識・理解を増やすことにつながると改めて考えることが出来ました。

・外国人児童がこんなにも多いと思わず、もし私の学級にそのような児童がいたら、適切に対応できるかどうか不安です。教員にはあらゆる能力が必要とされているのだなと思いました。

・日本語指導について、興味があったので参考になりました。学校によっては、日本語指導が必要な子が多く進んでいる学校、少なく進んでいない学校で指導にどのような差があるのか気になりました。一人一人、課題となる点も違うと思うので、どのように実態を把握し、達成させる目標などをどのように設定し、進めていくのかに興味を持ったので、自分自身でも調べてみたいです。

・他府県などに比べて、進んでいる独自のプログラムだけでなく、そうせざるを得なくなった背景や、現在の四日市の抱える問題などについてもお話を聞かせていただき、実際の現場の意見を聞くことができ貴重な経験になりました。また、指導が家庭の事情で十分な学びができないままに学校に行ってパニックになってしまうという問題において、児童よりも、先生がうまく寄り添えなかったことに原因があり、そのような子に対するサポートの体制を先生が作っていくための、先生に対する指導が必要と感じました。

・四日市市の外国人児童教育について詳しく知ることができました。このことを通して、奈良についても私の地元である兵庫についての現状も知る必要があると感じました。また、いろんな地域についての現状について知り比較などもしてみたいです。

・日本語がわからない児童にとっても個別に丁寧に指導を行うことで、児童がどこにつまず

いているのかが分かり適切な指導が行えているのだと思いました。日本語で教科を学ぶのではなく、教科から日本語を学ぶことで学力を身につけつつその延長で日本語が学べるのだと知ることができました。これからは外国から来た児童であってもすべての児童生徒に教育するという意識を持っていきたいです。

・四日市市の取り組みの中で外国にルーツがあったり言語を話せたりする教師だけが、外国人生徒の問題に関わるのではなくて全員の問題として取り組むことが大切だと思いました。

・外国籍の子供が何を思っているか、そして、違いに寛容になり、認め歩み寄るということは外国とか関係なく、人間関係においても重要と思いました。

・JSL カリキュラムについてもっと知りたいなと感じた。

・私自身小中学校のころ、学年で４，５人の在日外国人がいました。どのように日本語を学んでいたのか考えていなかったのですが、先生方も子供たち自身も多くの苦労があったのだと感じました。これからどんどん増えていく在日外国人に対して、他の日本人と平等に教育して、明るい未来へ導いていかなければならないと思いました。

・私はクラスに外国の子がいたこともなく、教育実習などでも外国の子と接する機会はなかったので、実際の事例などが大変勉強になりました。想像していたより様々な国の子どもが学校に通っていることがわかり、一人ひとりに寄り添う大切さを感じることができました。

・外国人の児童・生徒にとっては、日本の教育の慣習が通じないこともあるから、まずはその子どもの文化を理解することが必要なのだと思った。

・周りの子どもたちの多様性への理解が大切であると感じた。また、教員自身も理解が大切であると感じた。

・背景を理解し、支援する。分からないことがあると不安になるのは当然であり、ひと声かける必要性を感じました。

・四日市市の外国人児童生徒の多さに驚きました。外国人生徒に限らず、学級という集団を見ていく中で、一人一人と向き合い、確実に力をつけていくという意識を大切に授業を作り、接していきたいと思いました。

・グローバル人材育成の授業は日本人の子どもに向けて行われるものとばかり思っていたが外国にルーツをもつ子どももその対象であるということを改めて認識させられた。このような多角的な視点を持つことは重要だと感じた。

・“すべての児童生徒に力をつけるという確固たる意識”ということに共感しました。このような意識を多くの教育関係者が持つためにどのようなアプローチをされているのか知りたいと思いました。

・子どもたちのかかえているつらさにまずは気づき寄り添うことは、子どもが外国人であろうが日本人であろうが関係なく、教師として大事にしないといけないと思いました。

・普段外国人の児童・生徒を意識して過ごすことはあまりないのですが、着実にその人数

は増加しているんだと思いました。その子どもがどれくらい日本語を話せるのか、日本の文化をどれくらい知っているのかなど、子ども理解を深めることから外国人児童生徒教育は始まるのではないかと思いました。

・「すべての児童生徒に力をつける」という言葉に感動しました。外国人児童だけでなく、子どもの立場に立って考えるのは今後教員にとって必要な力だと思います。

・多くの国の子どもがいる現状と増え続ける現状とでよりグローバル化について考えねばならないと感じました。

・日本人の児童も外国人の児童も根本は人間として共通の部分を持っていて、我々は肌の色や言語の違いでどうしても区別（差別）してしまうが、教師は児童生徒が皆、「学習したい」という思いを持っていることを信じて、良くも悪くも平たく接することが大切なことだと思いました。自分は違いを与えていることを意識していなくても、児童は敏感に感じとるのでは？

・私も三重県出身で四日市ではないが比較的外国にルーツを持つ児童生徒の多い校区に住んでいて、四日市と似た取り組みで初期日本語指導教室を行っている。実際私の母も日系人であるため、日本語指導教室でボランティアの講師をしている。三重県は外資系の工場も多く、外国人が家族で出稼ぎに来るケースが多いので、学校教育もまともに受けることができていなかった子がいる可能性も視野に入れて教員としての仕事をしていかないと思った。

・Q. 現地で学校教育を受けることができていない児童生徒の割合は何％ぐらいでしょうか。

・話を聞いて、グローバル人材を育成する際に、対象となる子どもは日本にルーツを持つ子どもだけだと思っていたが、外国にルーツを持つ子どももいるのだと気づいた。周りと言語が違い、不安な子どもも周りの子と同じように学びたいと思っていると思うので、その気持ちを支えられる教師になりたい。

・外国人児童の具体的な人数や教育の状況を初めて知り、驚くことがたくさんありました。1 つの学校に 100 人を超える外国人児童がいると、学校内の文化的な行事はどのように行うのか、教室でみんなと授業を受けるには、どの程度の力をつけさせるのかなど気になりました。

・地域によると思いますが、海外にルーツを持つ子どもが学校に多くいるとわかりました。自分が勤める学校にもそのような子どもが在籍している（するかもしれない）と考えると、不安なことが多くなるなあと思いました。時間的にも余裕がない中でどのように寄り添っていくべきだろうと感じました。

・今の外国人生徒の教育現場の現状について知れてよかったです。担任一人で多国籍、多言語のクラスを見ていくことは難しいと考えますが、どうしていこうか…というのが今の感想です。実践も勉強になりました。ありがとうございました。

・いろんなことをためした中で、児童のみなさんが全員参加でつくる側となることでイキイ

キしていくのがすばらしいと思いました。
・外国人の子ども達への教育に研究しながら、教育実践を行っているところが、外国人として、感謝の気持ちを持ちました。
・やさしい日本語を自分は話せていないと思いました。相手の理解力に任せて話してしまっているので、気を付けたいです。外国人生徒・児童の数の多さに驚いた。また、その言語の種類も非常に多いことがわかった。学習指導要領の外国人児童・生徒の項目には今まであまり注目していなかったので、よく読んでおきたい。
・外国籍のお子さんは日本に定住するのでしょうか？最近は英語での授業を希望する方が増えています。インターナショナルスクールに入学させるのは学費が高すぎる（留学して、日本に定住しようと考えている方が多い）と感じているので、日本の公立学校に入学している方が増えています。

●講演の感想

・複数の言語を学んでいるにもかかわらず、母国語と同等のレベルまで到達していなければ、話せる、書ける、読めるとは思えない状況を実感した。けれど共通している部分がある図を見て、思考や理解は断続ではなく連続というのが本質なのかもしれないと考えた。
・複言語能力という新しい言語感、新しい視点を教えていただきました。複言語主義は日本に入って来るのでしょうか？多様性は大分進んできていますが…。
・自分の中の言語を考える活動で、外国にルーツのある方や英語の先生の色ぬりを見て、それぞれの結果がおもしろく興味深かったです。
・言語や文化の違いを知り、学ぶということはとても重要だが、それに興味を持つこと、そして、それに向かっていく態度や姿勢が最も大切だと感じた。経験に勝るものはないと感じる話だった。新しい環境にどんどん自ら飛び込んで、考えや価値観をアップデートさせていきたい。
・“複言語能力”という言葉の定義を初めて知り、それがもたらす能力や資質についても深く知れ、面白く感じました。
・複言語能力に関して、スコットランドの教育方針が気になったので、日本でも利用できればいいなあと思った。
・多言語の実例で私たちの活動をとりあげてくださってありがとうございました！多言語を使うということは想像力を沢山使うことだと思うので、ぜひ先生を目指すみなさんにも考えていただけたらと思います。
・違う言語に触れることが、直接的に価値観を伝え合うことにつながることを知りました。一言語の中に、多様な考え方がある貴重さを改めて感じました。
・実はつい最近複言語主義という単語を耳にしました。特にわからないままいましたが、複数の言語を知ることで、自身の能力のある部分に活用され、伸ばせるものであると知

りました。
・自分の中の言語を考えるのが面白かったです。でも大人になればなるほど自信を無くして、できないことにばかり目がいってしまうからなかなか上手くすすめられませんでした。海外の人とか、子どもはスラスラかけるんだろうなあという気がしました。グローバル人材の育成を通して、自己肯定感の強い子どもを育てていきたいなと思いました。
・言語的な視点からお話を頂いて、基底言語能力と複言語能力はとてもふい落ちしていて、アクティビティにおいても、自分の中の言語を再認識し自分をより見ることができました。お話ありがとうございました。
・自分の中で勝手に“言語を話せる”という行為のハードルを上げてしまっていたことに今回の講演で気付くことができました。その中で、この行為のハードルを自分たちで下げていくこと、自分たちの方から他の文化、関わりに対して積極的姿勢をもっていくことがグローバルな思考をもつグローバル人材に必要な前提であると感じました。また、この考えは日本国内方言や郷土の文化においても言えることで、これらの文化についても関わっていくことで文化の継承はよりスムーズに行われていくのか考えました。
・言語能力、言語教育に関して、興味深く聞いていました。言語的、文化的に多様な社会において個人がどのように生きていくのか考えるのが非常に大切だと感じました。「外国語」として英語が推し進められていく中で言語、文化のその背景を知り自分自身が多様な言語を知ろうとする姿勢が必要だと感じました。
・自分の中にある言語を書きだし、色塗りをしたとき、極端な大小が現れた。興味をもって他の言語に触れてみたら自分の視点も広がり考えも深まると思う。

・社会に求められている人間を育てるのが教育だと捉えてしまうと教育が社会に隷属した状態になってしまうことが印象的だった。
・授業内で行った内容で未だモヤモヤと分からないことがありましたが詳しく聞くことができ、全てではないですが分かることができました。実際の現場の先生のお話を聞ける機会は中々ないのでとても良い機会になりました。
・グローバル人材と聞くと自分には縁遠いように感じていたが、強ちそうでもなく、自分にできることはたくさんあるのだと思いました。
・グローバル人材について定義し、関心を持つことがこれからの社会や教育に必要不可欠なことだと分かった。
・グローバル人材の定義がとても重要であると再認識しました。
・“グローバル人材”という言葉は聞くけれども、そのルーツを知って驚いた。自分がどんな言語を持っているかと考えたときに、思っていたより多くの言葉や文化が自分の中にあっておどろいた。
・漠然としていた「グローバル人材」について、自分の中に落とし込めた気がします。もしかすると、海外と関わるだけではなく、今日のように他人の考え方・価値観を吸収しよう

とすることも「グローバルな姿勢」になるのではないかと思いました。

・子どもの感性を否定するのではなく一旦受け止めてから、どうしてそう思ったのか考えること、理解しようとする熱意を持つこと、自分自身を見つめなおすこと、言語的・文化的にどう関係していてどういうつながりがあるのか、さまざまな視点や多様性を持つことがグローバル化、グローバル人材育成の一歩になるように思いました。

・グローバル人材の育成と聞くととても難しく感じますが、実はとても身近なことで日常的な考えがきっかけとなることもあるのかなと思いました。今日をきっかけに学びを深めたいと思います。

・グローバル人材の育成は自分が想像していたよりももっと前から意識されていると知ることができました。熊谷先生や吉村先生のような小数の意見にも耳を傾けて、その子の個性すべての人の多様性を受け入れることがグローバル人材を育成する上で大切なことだと思いました。また、他の国の学習指導要領も見てみたいと思いました。

・吉村先生には 4 人の先生がしてくださった話をまとめてくださるような話をしてくださったので、自分の中での学びをまとめることができました。「身近なグローバル化を意識する」ことはとても大切だと思ったので、私も自分なりにグローバルを見つけて関わっていきたいと思いました。

・自分自身の経験からグローバルな視点を持つきっかけになることがあるのだなと思いました。日常的に使っている言語についてあまり改めて考える機会はありませんが、改めて意識してみると、自分を振り返る機会になり、他者と関わり合う中で、自分と他者の差異、共通する部分を意識することができると思いました。

・今日、講演を聞くまで「グローバル」という言葉をよく分かっていませんでした。

・自分の話せる、少しでも知っている言語は何だろうと考えると本当に数が少ないのだと思いました。また、講演してくださった先生方と比べて自分はなんて経験不足なんだろうと思いました。旅行程度でしか今後海外に行く予定はありませんがせめてそのときだけでも、少しでも外の世界を感じて”開かれた態度・価値”で学び続けていきたいです。

・先生方のグローバル教育を始めたきっかけのお話は、自身にとってのグローバル教育を考えるうえでもとても興味深かったです。スコットランドの複言語主義などどの言語で話すかを選びコミュニケーションができる力は視野を広げてくれそうだと思いました。

・教員がまずグローバル人材育成に関して知識を持つことが必要だと実感した。

・今の時点でグローバル人材とは言えない自分がグローバル人材を「育成」しなければならないということに改めて難しさを感じました。そのため、今日のお話を聞いて、まず「グローバル人材とは何か」ということを知れてよかったです。価値観の多様性を本当の意味で理解するというのは難しいことだと思います。これから、時間をかけて今できることを考え、確実に身に付けていきたいと思いました。

・「グローバル人材」のイメージが今まではずっと曖昧だったのですが、今社会がどんな人材を求めているのか、どんな資質能力が必要なのか少しわかった気がします。複言語

能力については、学校教育にどのように取り入れればいいのかわからなかったので、これからも調べたりして考えていきたいと思います。
・自分は留学生であるが、あまり「グローバル化」を意識していませんでした。これから、身近な文化や価値観などの差に関心を持てるようになりたいです。
・今まで何度も耳にしてきていたグローバル人材のイメージをいわれるようになった経緯とともに教えていただいたことで、理解できるようになったと感じた。言語教育を通して、国際理解・多様性の理解につなげるという考え方は岸下先生、大形先生のおっしゃっていた内容と重なるところが多くあると感じた。言語は異文化と関わる上で最も違いの分かりやすい項目であると思うので、そこから教えていくことで、子どもたちも異文化について理解するハードルが低くなるのかなと感じた。
・1～3 のお話を聞いた実践的なことを理論で説明していただいたので、少し難しそうだと最初感じましたが、内容がよく入ってきました。一教員として、前線で「グローバル人材」を育成できるよう来年度から試行錯誤していこうと思います。ありがとうございました。
・異文化について興味を持って学ばなければならないと分かりました。
・「グローバル人材」という言葉について学習指導要領に記載されていること以上のことを考えたことがなかった。具体的にどのような教育、どのような能力が必要で、そのために教員は何ができるのかを考える機会となった。「勝ち抜くこと」に主眼が置かれている印象は確かにあり、社会の在り方のレベルから根強い問題があるようにも感じた。
・様々な先生が今の実践にいたるまでの話は、とても勉強になりました。教師自身がいろんなことに興味をもって行動をおこし、物事を批判的にとらえることで、目指す教育が見えてくるかもしれないと思いました。「自信＝自身」という言葉が印象的でした。
・総合的に考える力と、重内先生が仰っていたことが心に残りました。自分はそのような授業展開に疑問を持っていたのに、教育実習では段階をつくって進めていたなあと改めて反省しました。熊谷先生のおっしゃったことにも共感し、だけれど、そのような教育を受けてきてしまっているから、それが無意識に出てしまいがちだと思いました。これはグローバルな人材を育成するには足枷になってくると思います。無意識を意識的に変えていく必要性を感じました。
・3 組の先生方のグローバル教育に関わるきっかけの話が聞くことができてよかったです。ポジティブな動機、ネガティブな動機かは違うとしてもそれがきっかけになるかもしれないということは確かだということに気づきました。
・講演をしてくださったそれぞれの先生方が、今なされている実践をするに至ったきっかけを話してくださり、画期的なアイデアを思いつくには、豊富な経験や非日常的な出来事を体験することが効果的であるかもしれないと感じた。
・紹介して下さった「共生ではなく競争」という言葉が、今の英語をめぐる政策の本質をついた言葉として落ちました。何のための外国語教育なのかを常に問いながら実践を作

りたいと思います。

・「共生」と「競争」昨今、グローバル教育と謳われているが、そこでは教科理解とそれに伴う「共生」の意識が強く根付いている。しかし、本来は地球規模でお互いを尊重し認め合うはずが、いつの間にか自国の優れた文化を主張したり、「我らが国際舞台で活躍しよう」という熱量が強く、「競争」の意識が取って代わってきているのではないかという問題提起が興味深かった。

・講演の中で、今日話をしてくれた先生たちが実践を行うようになったきっかけの話がとても印象的だった。海外で違う価値観に触れたり、教材などに疑問を感じたりなど様々であった。「海外に行ったりして、いろいろな人生経験を積みなさい。」という人がいるが、私は別にそうは思わない。大切なのは、当たり前を疑うことだと考えている。海外に行って、自分の私生活と比べて何も疑問に思わなければ、特に海外に行ってまで価値観に触れにいく必要はないと思う。話してくれた先生は、道は違えど何かに疑問を持ったから今の実践に至ったのだと思う。そして私自身も意識的に当たり前を疑って考える人間になりたい。

・先生たちの今に至ったきっかけを聞くと、ほとんどの人が学生時代に経験したことや感じたことがもとになっていました。これを聞いて、学生の時に自分と異なる価値観を持つ人と接する機会や新しいことに挑戦しようとする気持ちを持つべきであると思いました。そして、この経験から得たものを子どもに伝えられるようにしていきたいとも思います。

・Q. 競争を批判的におっしゃられていると思いましたが、競争について、どう考えられているか聞きたいです。

●シンポジウム全体の感想

・グローバル教育が求められる世の中の教育とは知っていたけれども、実践となると聞いたことがなかったのでイメージがあまりできていませんでした。けれども今回のシンポジウムで実際の実践論をいくつも聞くことができ、自分の考えの 1 つとなることが出来ました。

・このような会に教師になっても参加し、常に学び続ける姿勢を意識して教壇に立ちたいと思いました。

・大変勉強になった。今後教員になる身として、私自身が知的好奇心を有し、知識を生成・伝達する身であろうと思った。

・どの話題についても、自分があまり触れてこなかった部分が数多くあり、刺激となった。

・とても刺激的で、熱い内容のシンポジウムでした。ありがとうございました。

・現在の大学生（教員養成）に求められる資質・能力の多様さにビックリします。多様な経験をしている者が教員に向いているか？

・プレゼン行われた皆さんとても準備されていて、経験豊富だった。憧れの姿だった。

・グローバルという言葉を聞いたとき、知識やその言葉を話せるというスキルについて考えがちであったが、そうでなくて、何が求められているのか、どんな子どもの姿を描くのかということを考えると、グローバルが指す意味はもっと違ってくると分かった。異文化理解について、子どもたちと考えていくためには、まず自分がもっと異文化について考えなければならないと感じた。
・多角的な視点から、それぞれ大変興味深いお話を聞くことができ、良い機会を頂けて嬉しかったです。ありがとうございました。
・グローバル人材育成と聞き、今まで漠然としたイメージしかもっておらず、具体的な内容や知識・能力、求められるものについてもなかなか考えることができていませんでしたが、実際の英語の授業の活動や教員として、軸をもっておくべき考えを得ることができ、今後の学習にもぜひ生かしていきたいと思いました！
・結局グローバルに、世界から必要とされている力は「コンピランシー（ズ）」に該当するような人間性等なのかもしれないと思いました。グローバルに、世界に目を向けることと自分自身を見つめ直すことは同じことなのかもしれません。
・シンポジウム前にグローバルと聞いたときはものすごく壮大なテーマだと思っていましたが、奈良には身近な題材や環境があり、クラスにも外国にルーツを持つ子どもたちがいて。決して人ごとではない、1 年を通して取り組まなければいけないことだと思いました。先生方の海外での経験を聞いて、私も色々な地域に足を運んで、自分の価値観を広げていきたいと思いました。
・言語・文化的レパートリーを増やすことは、自身がずっと目指してきたことなので、そのまま続けていきたい。外国人児童生徒がタイムリーで目に見える課題として現代にあるが、同じことが日本人の子にも言える。趣味、興味、経験してきたこと、スポーツ、漫画、音楽など、教師が生徒と共感できる分野レパートリーを増やすことが教師として大事だと思う。自身の夢、目標は間違っていないと再確認できた。「40 人と 40 通りの話ができる先生に！」
・グローバルというものに注目して、お話を聞くのは、なかなかないもので、とても面白く、私は今まで英語ばかり見ていたので、新しい視点を得ることができました。自分の経験を増やし、これからの世界で必要とされる教員に近づいていきたいと思いました。
・教育現場からの教師達の経験や講演をきいて、IB などの知識について勉強になった。良かったです。
・学校・教育現場での考え方を知ることができた良かったです。
・英語の教員を目指す自分にとって、グローバル人材について、知ることは必須だと思い、来たが、英語教員に限らず、全教員がいずれ経験することになりうる現実であることを知った。国際化が進む現代において、異文化を知り、理解することの大切さを将来、子どもたちに伝えていきたい。
・学習指導や人材育成のみならず教育養成という点においても、重要な考え方や心構えとい

うものに触れることが出来たかと思います。他者との違いを受け入れ、共生・多様性の心を身につけることで、より理解を深めるきっかけとなり得るのだと身に深み感じました。

・実は今まで、外国人児童に対する教育やグローバルな視点からの授業ということに関して、深く考えたことがありませんでした。どのような活動の中でも尊重し合うことが大切で柔軟な考え方が必要であると思いました。これから教員として働く上で、他人事だと思わずに、たくさんのことに挑戦し、子どもたちの表現する機会を増やせるような支援を行いたいです。

・今回、5 人の先生方の講話をお聞かせいただき、普段、自分たちが教育社会学特講という授業の中で学ぶ、IB やグローバルな人材とは？ということについて学んで議論している内容についてある種の答え合わせのようなことができ、自分たちが議論を深めていったことが間違っていなかったということを認識することができる機会になりました。また、勿論それだけではなく、自分たちが学校の授業だけでは学ぶことができない、現場の声や、より専門的な知識など、特に IB の分野において自分の考えを深めることができたとても貴重な時間を過ごすことができました。今回の経験をもとに国際理解・グローバルな人材・IB などに対応できる教師とは？ということについて考えていきたいと思います。

・それぞれの先生方の教育に対する強い意志を感じました。これからの教育は全ての人が一定の水準にするのではなく、一人一人がそれぞれ興味のある領域を開拓していく教育になるのではないかと想像しました。これからも今後教師が必要とされる資質・能力を理解し、自分なりにどう伝えていきたいか考えていきたいです。

・同じベクトルを向いている五人の先生方のお話を聞くことができ、とても興味深く、楽しかったです。共感することが多かったです。グローバルな世界に触れることで、多様性を知り、異文化理解を認めることができ、自国の文化や自分自身を認識し、尊く思うことができると思います。教員が視野を広く持ち、子どもたちに学びの場を提供することが求められると思いました。先生方、本日はありがとうございました。

・私は今年の 9 月と 10 月に内閣府の青年国際交流事業で韓国に派遣されていたので、外国との関わりについて今とても興味があります。そのときに学ぶことができたことがどう教育現場に生かすことができるのか悩んでいたので今回のシンポジウムで考え方のヒントを見つけることができました。新たな考え方にたくさん出会うことができたので、このシンポジウムに参加してよかったと思いますありがとうございました。

・大学の授業では、あまり詳細には外国人児童生徒の実態や外国語教育の実践について触れることがなかったので、今日のシンポジウムで様々な角度からグローバル人材育成について学ぶことができました。学校現場において、外国ルーツを持った子と出会った場合には、子どもの視点に立ち、どのような課題を抱えているのか、把握し、関わっていきたいと思います。

・外国にルーツを持つ児童生徒との関わりの中で、日本の教育に「適応」させる中で、「同化」させるのではなくて、その一人ひとりの民族的アイデンティティや背景を大切

にしなければならないと思いました。その生徒たちが母国の言語を身に付けられる支援がもっとあればよいし、彼ら自身が（教員も含め）自分たちを大切にしていけるように教育に携わっていきたいと思いました。また、ダブルであったりそのルーツを持っていたりというその多様性に向き合っていきたいと思いました。

・内容については非常に勉強になりました。ありがとうございました。タイムマネジメントのみ少し気になりました。
・グローバル人材の育成についてよく耳にする機会が増え、教員には一体何ができるのか、IB の取り組みやその他積極的にグローバル人材の育成に力を入れている学校に着目し、自分の考え、取り組みについて考えていきたいと思う。
・実践していることについて多くの方々が話してくださり、何も知らない私にとって学ぶものが多くありました。2020 年から外国語に対する学習が大きく変わるということで不安がたくさんありますが今日学んだことを大事にして現場でも生かしていきたいです。
・具体的な実践などのお話が多く、まだ現場を知らない身でもグローバル化の実感を持って考えることができ、大変勉強になりました。教員になるにはもちろん、教員以外であっても様々な背景を持つ人と関わっていくうえで必要な考え方を多く学ぶことができました。国語科ということで、日頃は日本語でのコミュニケーションについて考える機会が多いですが、今回のシンポジウムを通して、言語教育やコミュニケーション能力についての視野が広がりました。
・実践例を考えながら、グローバル人材の育成について学べて大変興味深かった。あまりイメージできていなかったが、本シンポジウムを経て、グローバル人材育成のありかたがよく分かった。
・今まであまり考えることや触れることが少ないことを考えるきっかけになった。
・人材の育成をする立場である人が何も知らないでは話にならないと気づきました。
・5 人の先生方の実践やエピソードを伺い、今までになかった価値観や考え方を知ることができ、面白かったです。本当に良い学びになりました。ありがとうございました。
・シンポジウムに参加することにより普段なら知ることのできないような話を聞くことができたのはとても有意義に感じた。今日学んだことを今後の自分に活かしていきたい。
・普段知ることのできない専門外の話題もあり、とても視野が広がった。最終年度とのことで、とても残念です。来年度以降も小規模であってもこのような機会があればよいと思いました。
・3 つの話題提供を通して、私の勤務校も考えていかないといけないと感じました。今も、日本以外の言語や文化を持つ子どもたちが在籍しています。これから増える可能性もありますので…
・「グローバル人材」と一口に言っても、その資質や学校に求められる能力は様々なんだと思いました。ただどの方のお話を聞いていても、違う文化を受け入れて理解しようとする姿勢は必要不可欠であるんだと感じました。自分と異なる文化をもった人と出会っ

たとき、拒絶するのではなく歩み寄れるようにしたいです。ありがとうございました。
・成績より社会の進歩によってもっと適応性・人間性を含める教育に感激しました。
・言語は人間が自己と他者、世界を理解するために不可欠。言語教育を世界と人間に対する理解・洞察にどうつないでいくか。
・3 名の方の話題提供をお聞きして、それぞれ違ったグローバル人材育成へのアプローチが深く、そして少し重なっている部分があって、そこが本当に大事な部分なのだと思いました。
・現在授業で学んでいる内容の多くをカバーしており、授業内だけでは理解することができなかったり難しいと感じた内容にも触れていただいたので、より一層理解を深めることができたように感じた。私自身、国際理解、外国人指導の観点に非常に興味があり、それに関する実践の内容やそれを行っている先生方の考えというものを聞けたので、将来教員になった際には、ぜひ取り入れて授業を展開していきたいと思った。
・シンポジウムに参加することを通して、今まで全く自分が考えたこともなかったことについて学ぶことができて、とても有意義な時間になったと考えている。講演の中でもあった「挑戦」する心をもって、これからの教師生活を行っていきたい。
・今までグローバルに関する話を聞くということはあったのですが、実際の教育現場ではどのようになっているのかなど深く考えるということはあまりありませんでした。今日、改めて考えることができ、自分の受け持った学級に外国人児童がいたらどのように学級作りをしていこうかや、外国語教育が日本語の大切さを改めて感じさせることができる授業であるということをより自分自身でも考えていこうと思います。
・グローバル人材育成について様々な先生方のお話を聞きました。世界で活躍できる人材の育成を目指す中で個々の可能性を伸ばす（広げる）、自信を持たせるといったことがグローバル人材育成ということなのかなと、今日のシンポジウムを通して考えが変わりました。
・どのお話も興味深く聞かせていただきました。全員の先生がとても個性的で魅力的だと感じました。様々な国の人や子ども関わってグローバルな活動をされているからこそ多様な人の価値を認められ、また自分の個性も磨いてこられたのかなと感じました。22 歳の大学生としても、来年度から教員として働く立場としても有意義な時間になりました。ありがとうございました。
・私たちはそういう教育を受けていないため、足りない部分を自ら興味を持ち学ばなくてはならないと思いました。そして周りの個性ある知識を持つ人と助け合うことが一番かと思いました。
・外国人児童・生徒に限った話ではないが、教員は１人１人の児童・生徒と真剣に向かい合っていくべき立場にあると改めて実感した。全体を見渡していくマクロの視点と、1人１人と向き合うミクロの視点そのどちらも必要であると考える。
・コの字型（の机配列）がよかったです。

教員養成大学における グローバル人材育成を考える

奈良教育大学　国際交流留学センター主催　シンポジウム

令和元年度学長裁量経費プロジェクト

学校教育現場における多文化化や外国語教育・異文化理解教育の変化といった社会的背景を受けて、教員養成大学における「グローバル人材」のあり方とその育成に関する検討が教員養成大学にとって重要な課題となっています。そこで奈良教育大学では、昨年度に引き続き、シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材を考える」を開催いたします。

日　時 / 2019年12月15日(日)
13:30～16:30　(受付開始13:10)

会　場 / 奈良教育大学
大会議室(管理棟2F)

参加対象 / 本学学生
本学教職員(附属校園含む)
一般の方

参加費:無料
定　員:50名

◆テーマ◆

教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える

「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か?」

◆プログラム◆

話題提供①「小学校の外国語教育の現場から」
話題提供者:岸下哲史氏(都祁小学校教頭)・大形憲治氏(椿井小学校教諭)

話題提供②「国際バカロレアと中等教育の現場から」
話題提供者:熊谷優一氏(大阪市立水都国際中学校・高等学校 国際バカロレア・コーディネーター)

話題提供③「外国人児童生徒等教育の現場から」
話題提供者:重内庸司氏(四日市市教育委員会指導主事)

講演「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必 要か?」
講師:吉村雅仁氏(本学教職大学院教授)

[お問い合わせ先]　奈良教育大学　国際交流留学センター
[参加申込み方法]　お名前・ご住所・ご所属を明記の上、下記アドレスまたはお電話かFAXにてお申し込み下さい。
E-mail : kokusai_ryugaku@nara-edu.ac.jp　電話・FAX / 0742-27-9177
[申し込み締め切り]　12月　10日（火）
[後援]　奈良県教育委員会、奈良市教育委員会

令和元年度学長裁量経費プロジェクト
教員養成大学における「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究

奈良教育大学　国際交流留学センター主催　シンポジウム

令和元年度「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」報告書

令和2年3月

国立大学法人　奈良教育大学　国際交流留学センター
〒630-8528　奈良市高畑町
国際交流留学センター
TEL・FAX　0742-27-9177
電子メール　kokusai_ryugaku@nara-edu.ac.jp
URL　http://cies.nara-edu.ac.jp/